

国際子ども図書館 の 窓

子どもの本は
世界をつなぎ、
未来を拓く!

第14号
2014.9

表紙デザイン：熊谷 博人氏

【写真 国際子ども図書館の活動 平成25年4月～平成26年3月】



日本ペンクラブ共催講演会
「私が子ども時代に出会った本」
講師：落合恵子氏
(平成25年4月21日)
p. 72

展示会

「絵本で知る世界の国々—
IFLA からのおくりもの」
(平成25年5月9日～6月9日)
p. 40



講演会
「児童文学と教育をつなぐもの—
教材「ごんぎつね」を
軸に考える—」
講師：府川源一郎氏(右)
宮川健郎氏(左)
(平成25年7月13日)
p. 70

科学あそび2013
講師：原田佐和子氏
（平成25年7月27日、28日）
p.67



展示会
「世界をつなぐ子どもの本—
2012年国際アンデルセン賞・
IBBY オナーリスト受賞図書展」
（平成25年8月22日～9月29日）
p.70

講演会
「那須正幹さんに聞く
—ズッコケ三人組からの
メッセージ—」
講師：那須正幹氏(右)
宮川健郎氏(左)
（平成25年10月5日）
p.70





子どものための音楽会
(平成25年10月13日)
p.68



児童文学連続講座
(平成25年11月11日～12日)
p.64



日本ペンクラブ共催講演会
「いま、フランスの子どもの本は？」
講師：コリーヌ・カンタン氏(右)
河野万里子氏(左)
(平成25年11月16日)
p.73

講演会

「トルコにおける児童書の執筆
と出版」

講師：メリケ・ギュンユズ氏(右)

(平成25年12月7日)

p.51



子どものための冬のおたのしみ会
(平成25年12月8日)

p.68

平成25年度子ども読書連携

フォーラム

(平成26年3月3日)

p.63



はじめに



第14号では、平成25年4月から平成26年3月までの国際子ども図書館の活動を振り返っています。

平成25年度も、国内外の関係機関と連携して、積極的にイベントを開催し、多くの方々に御参加いただきました。

展示会は「日本の子どもの文学」、「絵本で知る世界の国々—IFLA からのおくりもの」などを開催しました。また、電子展示会の作成にも取り組み、平成26年4月には「日本の子どもの文学」を、同年6月には「中高生のための幕末・明治の日本の歴史事典」を当館ホームページで公開しました。

現在、国際子ども図書館は、平成27年度末の新装開館を目指して、増築棟の建設工事を着々と進めています。新装開館時には、研修設備や専門資料室を改善・整備するほか、新たに中高生対象の「調べものの部屋」の開室を予定しています。平成25年度は、新しいサービスの内容を検討するため、欧州の約20の児童書専門図書館等に職員を派遣して情報を収集しました。また、平成24年度から2年にわたって実施した「中高生向け調べものの部屋の準備調査プロジェクト」の成果を踏まえ、平成26年3月に子ども読書連携フォーラムを開催し、報告書を刊行しました。

今年度も、各種イベントの開催、そしてインターネットなどを通じた情報発信に力を注ぐとともに、今後のサービス内容をしっかりと検討していきます。皆様からの一層の御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成26年9月

国立国会図書館国際子ども図書館長 佐藤 毅彦



【口 絵】

【はじめに】 =佐藤 毅彦 1

【調査・研究報告】

モンゴルの児童書事情 =津田 紀子 3
 死を描いた児童書——『ホワイト・レイブンス』、ドイツ児童文学賞受賞・
 ノミネート作品を中心に =中野 怜奈 13
 在外研究報告：欧州の児童書専門機関の取組について =平澤 大輔 24

【コラム】

国際子ども図書館で行う「ちいさな子どものためのわらべうたと絵本の会」
 =大森 尚美 33

【ハイライト】

平成25年度児童サービスワークショップ =児童サービス課 36
 「絵本で知る世界の国々—IFLA からのおくりもの」展 =飛田 由美 40
 三つのケース展示に見る21世紀の日本の絵本 =広松 由希子 43

【国際交流】

第79回国際図書館連盟（IFLA）年次大会参加報告 =飛田 由美 46
 韓国国立子ども青少年図書館との業務交流に参加して =橋詰 秋子 48
 講演会「トルコにおける児童書の執筆と出版」 =企画協力課 51
 外国からの主な来訪者 =企画協力課 54

【コラム】

シンハラ語の絵本：スリランカと日本の架け橋 =藤代 亜紀 55

【平成25年4月から平成26年3月までの主な出来事】 58

【活動報告】 60

【数字で見る！国際子ども図書館】 76

【国際子ども図書館利用案内】 80

モンゴルの児童書事情

津田 紀子

1. はじめに

モンゴルの児童書事情について紹介する前に、モンゴルと人々の暮らしについて簡単に触れておきたい。

モンゴルは、156万4,100平方キロメートルという日本の約4倍の国土に264万7,575人が暮らす国である¹。草原や砂漠が広がる大地で、人々は、古くから馬、牛、ラクダ、ヒツジ、ヤギを飼い、ゲルと呼ばれる組立ても分解も簡単な移動に適した家に住み、季節ごとに移動しながら遊牧生活を行ってきた。

モンゴルには、約24の部族が暮らしているが、その中で最も多いのがハルハ族で人口の約8割を占める。公用語は、ハルハ族のハルハ方言が使われているが、それぞれの言葉で話しても通じ合う。モンゴルの最西端に位置するバヤンウルギー県はカザフ族が多いため、モンゴル語とカザフ語が公用語となっている。また文字は、ロシアのキリル文字に二つの母音を加えた文字が1940年代から使われており、児童書もこの文字で出版されている。

歴史的には、13世紀にチンギス・ハーンがモンゴル帝国を築き上げたが、帝国崩壊以降、17世紀頃から20世紀初頭まで清朝の支配下にあった。1911年に清朝から分離独立、1921年の人民革命を経て、1924年にロシアに次ぐ社会主義国となった。1990年の民主化運動により、現在は民主主義、市場経済の道を歩んでいる。

モンゴルは子どもの多い国で、全人口264万7,575人のうち15歳未満の子どもの数は74万1,576人、約3割近くを占める²。学校制度は、社会主義時代は10年制であったが、現在は12年制が採用され、最近では英語教育や理数系教育などの特徴を打ち出した私立学校が人気で、小学校や中学校の受験も盛んである。遊牧民の子どもたちは親元を離れて寄宿舎に入ったり、村の中心部に住む親戚の家に預けられたりして学校に通っている。

¹ монгол улсын үндэсний статистикийн хороо хүн ам, орон сууцны 2010 оны улсын тооллогын үр дүн

² 同上。

2. 暮らしと口承文芸

モンゴルは口承文芸の宝庫である。トリーチと呼ばれる語り部がトプショールという楽器を奏でながら何日にもわたって語る叙事詩、移動の途中などに馬やラクダの背でおじいさんやおばあさんから語ってもらう民話や伝説、祭りやお祝い事ではユール（祝歌）、マグタール（讃歌）が格調高く詠まれ、子どもたちは、なぞなぞ、早口言葉などで知識を増やし、美しく正しく話せるよう言葉の訓練をする。

このように普段の暮らしからお祝いや祭り、子どもの教育やしつけ、遊びなど生活のあらゆる場面において、モンゴルの人々は口承文芸を生き生きと語ってきた伝統がある。

モンゴルの口承文芸は多くが韻文である。モンゴルの韻文は、頭韻を踏むので、覚えやすく語りやすい。児童文学作品においても韻文作品の割合は高く、社会主義時代を知る人の話によると出版される児童書の7～8割が韻文作品であったという。現在出版されている児童書においても韻文作品は好まれており、子どもたちは韻文詩を学校や家庭で暗唱するほか、詩の朗読コンテストなども開かれている。

3. モンゴル児童文学の歴史

次に、モンゴル児童文学の歴史を概観する。本稿では、モンゴル児童文学発展の過程を、1920年代半ばから1950年代半ばまでの第1期、1950年代半ばから1989年までの第2期、1990年以降の第3期に区分して述べることにする。

3-1. 1920年代半ばから1950年代半ばまで

モンゴルは、17世紀から清朝の支配下にあったが、1911年に独立、1921年に人民革命が起り、新しく樹立された人民政府は近代化と革命思想の啓蒙強化のために教育活動を推進した。その一環として全国に学校が作られたほか、1924年に国立の図書館（Улсын номын сан судар бичгийн хүрээлэн）が建てられて教育環境が整備され始めた頃から、子どもを読書対象にした作品が出版されるようになった。

モンゴル文学の礎を築いた作家の一人 D. ナツァグドルジ（D. Нацагдорж）は、1925年、ピオネール³中央事務局長に就任し、少年少女に向けた「ピオネールの

3 社会主義時代に存在した少年少女の党の組織。

うた」(*Хойчийг залгамжлагч багачуудын дуу*)を発表した。この歌は、子どもに向けて書かれたモンゴルで最初の作品と言われる。

また、1926年には子ども向け雑誌「継承者たち」(*Залгамжлагч*)が出版されたほか、当時を代表する作家である S. ボヤンネメフ (С. Буяннэмэх) の「遠くをめざした金の魚」(*Алсыг зорьсон алтан загас*, 1927)、Ts. ダムディンスレン (Ц. Дамдинсүрэн) の「賢いこひつじ」(*Цэцэн хурга*, 1931)、D. ツェベグミド (Д. Цэвэгмид) の「牧童ナイダン」(*Хоньчин Найдан*, 1935) など、子どもたちを読者対象に含めた作品が発表された。

1940年代は、1920年から1930年代に築かれたモンゴル児童文学の礎を更に発展させた時期となった。

1941年には、現在使われているキリル文字が採用され、出版活動はますます広がりを見せる。1944年、少年少女対象の新聞「ピオネーリー・ウネン新聞」(*Пионерийн үнэн сонин*) 発刊、1948年に国立人形劇場 (Хүүхэлдэйн төв театр) が設立され、最初の劇が上演されたことで、脚本も書かれるようになってきた。

この頃の代表的な作品としては、Ch. ロドイダンバ (Ч. Лодойдамба) の「帽子をかぶったオオカミ」(*Малгайтай чоно*, 1947) がある。この作品は邦訳が『帽子をかぶった狼』(恒文社, 1984) という短編集で出ているほか、2013年にもモンゴルで再出版された。そのほかの作品として、P. ホルロー (П. Хорлоо) の「アルトとムング」(*Алт Мөнгө хоёр*, 1946)、Ch. ルハムスレン (Ч. Лхамсүрэн) の「栗毛の馬」(*Хүрэн морь*, 1947) などがある。

モンゴルで初めての絵本と言われているのが、Ts. ナムスライ (Ц. Намсрай) の作品だ。「わたしのあたらしいデール⁴」(*Миний шинэ дээрл*)、「わたしのあたらしいくつ」(*Миний шинэ гутал*) が国立中央図書館に所蔵されている。これらはモンゴル文字で書かれ、ページ数は8ページとごく短い。「わたしのあたらしいデール」は、モンゴルの自然に始まり、お父さんとお母さんの手作業を経て、子どもが新しいデールを着せてもらうまでが、絵と文で描かれている。出版年について、児童文学研究者の G. ガンボルド (Г. Ганболд) は1924年とし、児童文学研究者の D. オヨンバドラハ (Д. Оюунбадрах) は、1930年代としてい

4 モンゴルの民族衣装。立て襟でボタンを右肩で留め、男性はブスという帯を締める。ブーツを履き、帽子をかぶるのが伝統的な装いである。

る⁵。作家の経歴については軍隊の将校であったらしいという話が伝わる以外、詳しいことはよく分かっていない。

この時代の作品は、革命の宣伝や教訓色が強いものも多いが、モンゴル児童文学の礎が築かれ、今のモンゴル児童文学へとつながっていることは確かである。

3-2. 1950年代半ばから1989年まで

1950年代になると、「児童文学作家」を名乗り、児童文学のみを書く作家が登場する。モンゴル児童文学研究者の G. ガンボルドは、1955年から1989年をモンゴル児童文学発展の第2期としているが⁶、1955年は L. トゥデブ (Л. Түдэв) が「こんにちは、子どもたち！」(Сайн байцгаана уу, хүүхдүүдээ!) でデビューした年で、翌年には、D. ソドノムドルジ (Д. Содномдорж) が「エンフちゃん」(Энх) を発表し、この二人の作家の出現とその後の活躍が機となって、児童文学は独立した分野としての地位を築くことになった。

L. トゥデブは、1935年にゴビアルタイ県で生まれ、労働英雄、人民作家、国家賞など多くの賞や称号を受賞した、誰もが知る有名な作家、文学者である。児童文学の代表作は1970年に発表した「ぼくが世界を知った歴史」(Хорвоотой танилцсан түүх, 1970) だ。これは、遊牧民の少年「ぼく」が主人公で、石、笛など、身近にある様々なものから、自分を取り巻く世界を理解していくお話だ。

D. ソドノムドルジは1928年生まれ、作家たちが大人を対象とした文学をメインに、時折子どもを対象とする文学を書いていた1950年代に、児童文学作家を名乗り、生涯児童文学作品のみを執筆した初めての作家だ。代表作は、「ジグミドとトグミド」(Жигмид Тогмид хоёр, 1958)、と「ノロブのおはなし」(Норовын намтар, 1957) である。「ジグミドとトグミド」は、果物摘みに行ったジグミド、トグミド二人の男の子のユーモアと教訓のある短い詩で、歌にもなっており、今でもよく歌われる。「ノロブのおはなし」は、文具を乱暴に扱う男の子ノロブから文具たちが逃げ出すが、結局ノロブが反省して、文具たちは戻ってくるというお話だ。原作は長い韻文であるが、現在も再出版されたり劇で上演されたりしている。

⁵ Монголын зохиолчдын бүтээл дэх хүүхдийн зохиол р.16 (Г. Ганболд) <http://d.oyunbadrakh.pms.mn> (Д. Оюунбадрах)

原本には「24年」とあるが、1921年の人民革命後間もない1924年の出版には疑問も残るため、ボグドハーン即位の西暦1911年を元年とする共載24年(1935年)とも考えられる。

⁶ Монголын зохиолчдын бүтээл дэх хүүхдийн зохиол р.14

彼らに続いて、**J. ダシドンドグ**(**Ж. Дашдондог**)、**D. ガルマー**(**Д. Гармаа**)、**S. ナドミド**(**С. Надмид**)らが児童文学の世界に入ってくる。

D. ガルマーは1937年生まれの作家であり、多くの作品を書いているが、その中でも中編小説「愉快なお話」(*Хөгжөөнтэй туужууд*, 1969)は代表作だ。学校で寮生活を送る子どもたちが子どもらしい思い付きから様々な事件を巻き起こし、先生やクラスメートと笑ったり泣いたりする姿を生き生きと描いた作品で、1988年には国家賞を受賞している。

J. ダシドンドグは1941年生まれの児童文学作家・詩人で、現在、国際児童図書評議会(**IBBY**)モンゴル支部代表も務める。1957年、17歳で児童文学作家としてデビューして以来、半世紀以上にわたって一貫して児童文学に携わり、今でも第一線で活躍する。**J. ダシドンドグ**の詩集「お父さんお母さんほく」(*Аав ээж би*, 1971)は、モンゴルの子どもたちに40年にわたって親しまれている作品だ。邦訳に『みどりの馬』(てらいんく, 2004, *Ногоон морь*)、『しんせつなおとなりさん』(キンダーおはなしえほん, フレーベル館, 2007, *Алтан хөрш*)、『男の三つのお話』(『天国の風～アジア短編ベストセレクション』, 新潮社, 2011, *Эрийн гурван үлгэр*)がある。

S. ナドミドは1934年生まれで、代表作に短編集「肥料の雨」(*Бордоотой бороо*, 1969)、子ども向け小説「首都への道で」(*Нийслэлийн замд*, 1986)などがある。空想力豊かかつ子どもたちの笑いを引き出す作品で親しまれた作家である。

この時代には多くの作家たちがソ連に留学し、ソ連の児童文学者や作家と交流を深め、お互いを高めながら、子どもたちの心を引き付ける作品を生み出して来た。現在まで読み継がれる名作と言われる本の多くが、この時代に生まれたものである。

とりわけ**L. トゥエブ**の



モンゴルを訪れたエストニアの児童文学作家エノ・ラウト(Eno Raud、最後列中央)、ソ連の児童文学作家ユリー・ソートニク(Юрий Сотник、最後列右から3人目)とモンゴルの作家・児童文学作家たち(1975年頃に撮影)

「ぼくが世界を知った歴史」、D. ガルマーの「愉快なお話」は、初めて世に出てから40年以上経つ作品であるが、これほどモンゴルの子どもたちの心を引き付け夢中にさせた本は今に至るまで出ていないと言われるほどで、モンゴル児童文学の金字塔と言えよう。社会主義時代当時の暮らし、思想を反映している箇所もあるが、民主化後もモンゴル児童文学の名作として何度も出版されている。純粹に子どもたちの楽しみのために書かれた力強い作品は、時代背景など関係なく、笑い、涙、共感を呼ぶのであろう。

ただし、社会主義時代は、テーマにも表現方法にも制限があり、国が許可しなければ出版することはできなかった。書いたものが党を批判したとされて、作家活動を禁止されることも珍しいことではなく、湧き出る思いを自由に表現したい作家にとっては、厳しい時代でもあった。

3-3. 1990年以降

●民主化直後

モンゴルでも、1989年末から民主化運動が盛んになり、1992年に新憲法が制定され民主主義国家となった。

作家たちは、自由なテーマと表現方法で本を出版することができるようになったが、一方で政治や経済、社会システムの混乱によって、人々の生活は苦しくなり、子どもの読書や読書環境の整備も後回しにされてしまうようになった。例えば、市の中心地の便利な場所にあった児童図書館は民間の銀行に、子ども映画館は証券取引所となり、作家たちは出版資金集めに苦勞し、たとえ印刷することも販売網が整っていないため、自力で販売するしかなくなってしまった。児童書において、美しい挿絵やカラーの印刷というのは、子どもの興味を引き付け、内容を分かりやすく伝える大切な要素の一つである。しかし、それには多額の費用がかかるため、質の良い本の出版は難しくなった。

しかし、いかにそのような状況であったとはいえ、児童文学作家たちの出版活動は手作業で作った小さな本や個人で発刊する児童新聞などによって地道に続けられた。

1990年以降の児童文学において特筆すべきことの一つは、子どもたちに向けたチンギス・ハーンについての作品が多く書かれるようになったことであろう。

社会主義時代には民族的な文化や思想は否定されており、チンギス・ハーンもタブーとされていた。人々は、チンギス・ハーンの名前を公に口に出すことはできず、

文学作品にもチンギス・ハーンの名前が出てくることはなかった。

しかし、民主化以降「チンギス・ハーン」のマンガ（全20巻）、チンギス・ハーンの苦難の幼少期からモンゴル諸部族を統一するまでの歴史本などが多数出版されたほか、例えばマンガス（モンゴルの民話に出てくる怪物）に襲われた男の子を助けるために、天からチンギス・ハーンが降りて来て退治する等、創作文学の中にも登場するようになった。

1980年代末から児童文学の世界に入り、1990年代の苦しい時代を経て現在モンゴル児童文学の中心となって活躍する作家として、O. ソンドイ（O. Сундуй）と D. バトジャルガル（D. Багжаргал）を挙げたい。

O. ソンドイは、主に詩や短編を創作し「夏の太陽はアイスクリームが好き」(*Зуны нар мөхөөлдсөнд дуртай*, 2008)、「すっごく大きな犬とたのしい詩」(*Аймаар том нохой буюу наргиантай шүлгүүд*, 2002)、「人形くらいのおかあさん」(*хүүхэлдэйн чинээ ээж*, 2009)などの作品を書き、金の羽賞⁷を2001年、2007年、2009年の3度にわたって受賞しているほか、作家同盟賞⁸、ナツァグドルジ賞⁹など受賞多数。D. バトジャルガルも詩集、短編、脚本など様々なジャンルを手掛ける作家で、「ダルハド族の思い」(*Дархад бодол*, 2007)などがあり、作家同盟賞、ナツァグドルジ賞、金の羽賞も受賞している。

●2000年以降

2000年前後から民間の印刷所・出版社が設立され、2003年には国立児童図書館の設置¹⁰、またモンゴル政府や世界銀行、世界各国の NGO などが児童書出版や図書館活動に力を入れ始めたことから、児童書出版、児童書を子どもに届ける活動全般に好転の兆しが見られるようになってきた。

加えて、近年の急激な経済成長に伴い、カラー印刷やハードカバーの本も当たり前のように目にするようになり、本屋の棚には豪華な民話集、図鑑、海外の児童書

⁷ 2001年から始まった文学賞で、詩、歌詞、児童書、翻訳、批評、脚本、散文（短編）、散文（長編）といった部門ごとに、その年に出た作品の中から受賞者が選ばれる。

⁸ 1964年から続く歴史ある賞。当初は1年に3作品が選ばれていたが、近年では1年に10作品ほど選ばれることもある。

⁹ 1966年の第1回から現在まで続く文学賞。2～3年に1度、作家、批評家、詩人、翻訳家といった文学者に対して授与される。

¹⁰ ウランバートル中心部の文化会館（Соёлын төв өргөө）内にある国立の児童図書館。社会主義時代にあった児童図書館が、1990年の民主化・市場経済化以降、国立中央図書館に一度編入され、その後2003年に文化会館内に設立されたものである。

の翻訳、マンガ、図鑑や辞書、絵本など一通りのジャンルが揃っている。

その中で、モンゴル人の児童文学作家の新刊は、まだそれほど多いとは言えないが、ベテラン作家の作品のほか若手作家として大手出版社 Selengepress の児童書編集者でもある Ch. ナランツェツェグ (Ч. Наранцэцэг) は、編集者としてモンゴル児童文学全集、世界児童文学全集の編集を手掛けると同時に、「町の犬」(Хотын нохой, 2008)、「草原の犬」(Хөдөөний нохой, 2008) といった作品など多数発表している。E. アマルザヤー (Э. Амарзая) は2010年から児童文学創作に取り組み始めた作家であるが、中学生男子が主人公の中編小説シリーズを執筆し、2012年には「すばらしい島」(Гайхамшигт арал, 2012) で金の羽賞を受賞した。1989年生まれの B. ガンチメグ (Б. Ганчимэг) は、詩集「のびるバス」(Сунадаг автобус, 2010) などの作品で高い評価を得ている。

研究面においては、児童文学作家でもある G. ガンボルドが2010年に出版した研究書「モンゴルの作家作品における児童書作品」(Монголын зохиолчдын бүтээл дэх хүүхдийн зохиол) は、モンゴル児童文学の歴史、作家、作品を網羅した資料価値の高い研究書である。

日本を拠点に活躍する絵本作家 B. ボロルマー (Б. Болормаа) と I. ガンバートル (И. Ганбаатар) にも触れておきたい。2004年頃から作品を発表している絵本作家夫妻で、夫の I. ガンバートルが文章を担当し、B. ボロルマーが絵を描くスタイルを採っているが、I. ガンバートルも画家であることから、作品全般にわたってお互いに意見を出し合いながら共同で作品を作っている。『おかあさんとわるいキツネ』(福音館書店, 2011)、『ゴナンとかいぶつ』(偕成社, 2013)、『バートルのこころのはな』(小学館, 2011) などを出版し¹¹、フランスや韓国などでも翻訳されている。

●世界とつながる

各国とのつながりに目を向けると、1990年初頭、モンゴル系民族の多く住むロシアのブリヤート共和国、カルムイク共和国、そしてモンゴル国の児童文学作家が連携して「モンゴル民族児童文学者協会」(Монгол үндэстэн хүүхдийн уран бүтээлчдийн холбоо) を設立し、児童文学賞「金の子馬賞」の創設、雑誌「子馬」(Унага) の発刊、1994年には合同フェスティバルを開催するなどの活動を行った。

¹¹ 上記3冊は日本語版がオリジナルとなり、モンゴルでは2014年現在出版されていない。

だが、当時はお互いの通信事情や経済事情が良くなかったことから、交流は数年で途切れてしまった。この協会の設立を発案し、取りまとめていたブリヤート共和国の児童文学作家 Ts. ジンビエフ (Ц. Жимбиев) が亡くなったこともあり、現在、活動は行われていないという。

中国の内モンゴル自治区との交流も2005年頃から活発となっている。内モンゴルの作家リグデンの作品「困難をのりこえた勇気ある男の子」(*Зовлон туулсан зоригт хөвгүүн*) がモンゴルで出版されているほか、J. ダシドンドグの作品「黒いカラスの白い歴史」(*Хар шувууны цагаан түүх*) も内モンゴルでモンゴル文字にして出版されて、お互いに交流を深めている。

また、モンゴルは、2005年に IBVY に加盟した。IBVY への加盟は、長い間望まれていたことではあったが、資金面の問題でなかなか実現に至らなかった。

加盟以来モンゴル支部代表を務める児童文学作家の J. ダシドンドグは、作家活動と並行して1991年から移動図書館活動が続けており、その功績で2006年に IBVY 朝日国際児童図書普及賞を受賞している。そして、世界各国とモンゴルをつなぐ窓として、講演や機関誌への執筆、各国の支部や作家との交流など活動が続けている。

4. 現在の書店の本棚から

現在、書店の児童書コーナーをのぞいて、いくつか注目できることとして、以下の点が挙げられよう。

ここ5、6年の間に新しく出て来た分野は、赤ちゃん絵本であろう。大手出版社 ADMON 社が取り分け力を入れている分野で、社内の児童書編集部「ジャンガル」(*Жангар*) が編集を担当し、形、色などの「はじめて絵本」シリーズ、子どもの素朴な疑問に答える「なぜなにシリーズ」など様々なシリーズを出している。ちなみに同社は、イギリスの出版社 Dorling Kindersley 社の図鑑や児童書のモンゴル語版も数多く出しており、その売れ行きも好調だ。

また、社会主義時代に子どもたちに人気となった作品の復刊が相次いで行われている。たとえば、L. トゥデブの「ぼくが世界を知った歴史」、D. ガルマーの「愉快なお話」、J. ダシドンドグの「お父さんお母さんぼく」、D. ソドノムドルジの「ノロブのおはなし」、Sh. ガーダンバ (Ш. Гадамба) の「子どもの頃の出来事」(*Багын явдал*, 1973)、Ch. ロドイダンバの「シャルガチン」(*Шаргачин*, 1954)、P. ロブサンツェレン (П. Лувсанцэрэн) の「水のうずもしくはボルゾー

のできごと」(Усны эргүүдэг буюу Борзооны явдал, 1972)などが相次いで復刊されている。これらの作品の中の生き生きとしたモンゴルの子どもたち、子どもたちを慈しみながらたくましく生きる人々、自然や家族を謳い上げた詩など、時を経てなお共感を呼んでいる。

もう一つ、子どもに向けた民話集の発刊が相次いでいるのも一つの特徴であろう。大手の出版社は、どこも立派な民話集を編集して売り出しているし、民話絵本、民話の DVD 等の売れ行きも良いと聞く。

モンゴルでは、ここ数年、経済が急激に伸びたことで、人々の生活は伝統的な生活から大きく変化している。都市では核家族が増え、子どもたちは、日本の子どもと同じようにパソコンやゲームで遊び、学校が終わると楽器、スポーツや語学などの習い事に忙しく、古くからの遊牧生活にはなじみがない。

このように経済や社会が大きく変化し、人々の生活スタイルがモンゴルの伝統的な遊牧生活から離れつつある今、伝統的な民話が書店の棚の多くを占めているのは大変興味深い。コンテンツが不足しているからとか、作家への原稿料の支払いが発生しないからといった話も聞くが、理由はそれだけではないだろう。

祖先から語り継がれて来た民話には、モンゴルの心、行動規範、教訓、遊牧民の知恵が込められている。たとえどんなに自分たちの生活スタイルが変化しようとも、先人の残したこれらの大いなる知恵を受け継ぎ、子どもたちが未来へつなげていくことを願って、民話を届けているのではないだろうか。児童文学作品においても、民話を下敷きにした作品や民話の語り口を取り入れた作品など、口承文芸の影響が見受けられる。モンゴル児童文学の未来は、これからも口承文芸の土壌の上に、その養分を吸収しながら、時代に即した新たな花を咲かせていくのかもしれない。

さいごに

子どもと読書をめぐる環境が徐々に充実し、人々が再び児童文学に関心を向け始めた今、児童文学作家たちには大きな期待が掛かっている。その期待を背に、彼らはまた新たなモンゴル児童文学の道を切り開いて行くだらう。今後どのような作品が生み出されていくのか、これからも注目し続けていきたいと思っている。

(つだ のりこ モンゴル児童文学翻訳者)

死を描いた児童書——『ホワイト・レイブンス』、ドイツ児童文学賞受賞・ノミネート作品を中心に

中野 怜奈

筆者は、2013年7月20日から8月31日まで、奨学金研究生としてミュンヘン国際児童図書館（Internationale Jugendbibliothek）に滞在した。近年ドイツで評価されている児童書に、日本とは異なるユニークなアプローチで死を扱った作品が多いと感じたことから、「死を描いた児童書のドイツでの受容」をテーマに設定し、同館の資料を利用した調査研究を行った。

The White Ravens（以下、『ホワイト・レイブンス』）は、同館職員が選んだ約50か国250作品を収めた国際推薦児童図書目録である。世界の優れた本を多くの国の子どもに読んでもらうことを目的として、毎年発行されている¹。1956年創設のドイツ児童文学賞（Deutscher Jugendliteraturpreis）は、政府の支援の下、児童文学協会（Arbeitskreis für Jugendliteratur e.V.）によって運営されている。ドイツ語に翻訳されていれば、国を問わず、受賞対象となる²。

本稿では、20世紀後半の傾向を踏まえた上で、主に2001年以降の『ホワイト・レイブンス』及びドイツ児童文学賞受賞・ノミネート作品の中から、死を描いた児童書を紹介する。



『ホワイト・レイブンス』

20世紀までの作品

ドイツでは1970年代から、それまで避けられてきた離婚、戦争、貧富の差、人種

- 1 1984年に *Die weißen Raben* として創刊。1986年以降は英語で出版されている。本稿中、同誌に収録された作品についてはその旨を記載する。
- 2 翻訳ではオランダ、北欧、英語圏の作品が多い。1996年から選考過程が変わり、「オナーリスト」は「ノミネート」という名称に変更された。ノミネートされた作品の中から、最優秀賞が選ばれる。本稿中、受賞及びノミネート作品についてはその旨を記載する。

差別の問題に意欲的に取り組んだ児童文学が見られるようになった。また1980年代以降、子どもの心理に焦点を当てた絵本が増えてきた³。その中で、家族との死別は、『どこにいるの、おじいちゃん?』⁴ (*Hat Opa einen Anzug an?*, 1997) 等、様々な児童書の題材となってきた。死の受容は、国を越えて共通のテーマである。スウェーデンのウルフ・スタルク (Ulf Stark, 1944-) は、『おじいちゃんの口笛』⁵ (*Kan du vissla Johanna*, 1992) で、二人の少年と老人の死別を描いている。

20世紀の終わりにオランダで書かれた絵本に、『ハンナのひみつの庭』⁶ (*De prinses van de moestuin*, 1992) がある。母親を亡くし、父親や弟の世話に疲れた少女は家を出て、庭に自分の居場所を作る。少女と弟の二つの異なる視点から交互に語られ、現実と想像の境界が曖昧になる様子が、詩的な文章でつづられる。*Voor altijd, altijd*⁷ (永遠に) には、娘を亡くした女性と少女の交流が描かれている。このような独創的な本が比較的早期に生まれたオランダの出版界は、児童書に対する考え方が日本より自由であり、対象を子どもに限定せず、一つの芸術表現として評価する傾向がある。またオランダでは1970年代以降、安楽死についての議論が活発になり、2001年に世界で初めて、安楽死が法律で認められた。こうした社会背景の中で、死を子どもに隠さずに語り、日々の一部として詩的に描いた作品も、受け入れられる余地があったのだろう。21世紀になると、ユニークな手法で死を描いた絵本が現れる。

³ 野村滋。ドイツの子どもの本：大人の本とのつながり。増補新版。東京：白水社、2009。
<請求記号 KS334-J12>

⁴ アメリー・フリート。どこにいるの、おじいちゃん? ジャッキー・グライヒ絵。平野獅子訳。東京：偕成社、1999。<請求記号 Y18-M99-535> ドイツ児童文学賞絵本部門1998年受賞。

以後、日本語に翻訳されている作品を『 』で示し、元のタイトルと出版年を()内に記す。未訳の作品に関しては、本稿の筆者による訳を()内に記す。当館に所蔵のあるものは<>で請求記号を示す。

⁵ ウルフ・スタルク。おじいちゃんの口笛。アンナ・ヘグルンド絵。菱木晃子訳。東京：はるぷ出版、1995。<請求記号 Y9-1352> ドイツ児童文学賞児童書部門1994年受賞。

⁶ アネミー&マルフリート・ヘイマンス。ハンナのひみつの庭。野坂悦子訳。東京：岩波書店、1998。<請求記号 Y18-M99-174> ドイツ児童文学賞絵本部門1994年オナーリスト。

⁷ Moeyaert, Bart. *Voor altijd, altijd*. Illus. Annemie Heymans. Tilburg: Zwijsen, 1992。『ホワイト・レイブンス』1993年収録・ドイツ児童文学賞児童書部門1995年オナーリスト。

21世紀の作品——タブーからの解放

ドイツの画家ヴォルフ・エアルブルッフ (Wolf Erlbruch, 1948-) は、度々死を作品のテーマにしているが、安易なハッピーエンドで終わらせるのではなく、大人も理解し難い大きな問題を正面から描いている。*Een hemel voor beer*⁸ (クマの天国) は、オランダのドルフ・フェルルーン (Dolf Verroen, 1928-) が文章、エアルブルッフが挿絵を手掛けた。クマの子どもが、祖父のいる「クマの天国」に行くためにワニやトラに食べてもらおうとするが、結局うまくいかず家に帰る。家族が寄り添って眠る温かなほら穴は、「地上にあるクマの天国だった」という一文で締めくくられる。死に対するアヒルの恐れと不安を描いた『死神さんとアヒルさん』⁹ (*Ente, Tod und Tulpe*, 2007) には、ワンピースを着た死神が、チューリップを手に登場する。エアルブルッフは、親しみやすい女性の姿に描くことで、これまでとは異なる新しい死神像を打ち出した。

スウェーデンの *Alla döda små djur*¹⁰ (すべての小さな亡き動物) は、小さなお墓で埋め尽くされた見返しが遊び心を感じさせる¹¹。この作品では、野生の生き物やペットの「葬儀屋」として、主人公は詩を作り、少女は穴を掘り、その弟は泣く、というようにそれぞれにふさわしい役割を担う。ハチの死骸を怖がっていた主人公は、最後の場面で、目の前で死んだクロウタドリクロウタドリの亡骸を胸に抱く。たった一日限りの「葬儀屋ごっこ」を通じて、子どもが何を感じ取ったかを、ユーモアを交えて描いている。

一方、ノンフィクションにおいても、死をめぐる疑



Alla döda små djur
(すべての小さな亡き動物)

⁸ Verroen, Dolf. *Een hemel voor beer*. Illus. Wolf Erlbruch. Amsterdam: Leopold, 2003.

⁹ ヴォルフ・エアルブルッフ. 死神さんとアヒルさん. 三浦美紀子訳. 東京: 草土文化, 2008. <請求記号 Y18-N08-J85> 『ホワイト・レイプンス』2008年収録・ドイツ児童文学賞絵本部門2008年ノミネート。

¹⁰ Nilsson, Ulf. *Alla döda små djur*. Illus. Eva Eriksson. 2nd ed. Stockholm: Bonnier Carlsen, 2006. <請求記号 Y17-B9856> 『ホワイト・レイプンス』2007年収録・ドイツ児童文学賞児童書部門2007年ノミネート。

¹¹ 墓標には、ニルソンが文章を手がけた『さよなら、マフィンさん』(*Adjö, herr Muffin*, 2002) の主人公をはじめ、子どもになじみのある名が刻まれている。

間に答える試みが続けられてきた。1979年にドイツで出版された *Ich will etwas vom Tod wissen: Geschichten vom Tod und vom Leben*¹² (死について知りたい: 死と生の話) は、食物連鎖や自然のサイクルを学び、家族やペットの死を経験する中で、死や老いについて考える子どもたちの姿を、モノクロの写真で伝える。スウェーデンの『死のほん』¹³ (*Dödenboken*, 1999) は、「死ぬ」とはどういうことなのか、科学、文化、宗教、伝説等、様々な角度から説明する。流産や葬式のように、これまで児童文学が避けてきた事柄にも触れている。

絵で語る

文が述べていないことを絵で表せる絵本は、死というデリケートな問題を扱う上で、時に効果的な媒体となる。フランスの *Ma maman est en Amérique, elle a rencontré Buffalo Bill*¹⁴ (ママはアメリカにいて、バッファロー・ビルに会った) は、バンドデシネ¹⁵の形式で少年の日常を描く。父親と弟との暮らしや学校生活の中で、母親がいないことを自覚し始めた主人公に、隣に住む少女が、少年の母親が旅先から送った手紙を見せる。母親は既に亡くなっていて、少女が手紙を書いていたことが最後に明かされる。文法や綴りの誤った手紙は、子どもの手によるものではないかと読者に予測させる。周囲の大人や友人とのやりとりが少年の目線で捉えられ、それぞれの置かれた状況と複雑な心情を的確な絵で伝える。

そのほか絵が語る物語として、ドイツの *Gehört das so??: Die Geschichte von Elvis*¹⁶ (どうして??: エルビスの物語) がある。少女が鞆を引きずりながら、「ど

¹² Becker, Antoinette. *Ich will etwas vom Tod wissen: Geschichten vom Tod und vom Leben*. Photograph. Elisabeth Niggemeyer. Ravensburg: Otto Maier, 1979. ドイツ児童文学賞ノンフィクション部門1980年オナーリスト。

¹³ ベニラ・スタールフェルト. 死のほん. 川上麻衣子訳. 東京: 小学館, 2010. <請求記号 Y5-N11-J13> 『ホワイト・レイプンス』2000年収録・ドイツ児童文学賞ノンフィクション部門2001年ノミネート。

¹⁴ Regnaud, Jean and Émile Bravo. *Ma maman est en Amérique, elle a rencontré Buffalo Bill*. 4th ed. Paris: Gallimard Jeunesse, 2007. <請求記号 Y16-B299> ドイツ児童文学賞児童書部門2010年受賞。

¹⁵ bande dessinée: フランス語圏の芸術性の高い漫画。

¹⁶ Schössow, Peter. *Gehört das so??: Die Geschichte von Elvis*. München: Carl Hanser, 2005. <請求記号 Y17-B7237> ドイツ児童文学賞絵本部門2006年受賞。

うして??!」と繰り返し叫ぶのを見て、犬、妖精、小人、クマのぬいぐるみ等、一風変わった者たちは不思議に思い、後をついて行く。読者は彼らとともに、彼女の怒りの原因を知る。鞆を開け、死んだ小鳥を見せる場面では、あたかも読者の前に鞆をつき出すかのように、それまで距離を置いて描かれていた少女がクローズアップされ、初めて上方から大きく捉えられる。映画のように展開する絵の連続性の中で、読者は自然に少女に共感する。登場人物が心を通わせ、立場を越えて悲しみを分かち合う姿を、幼い読者も理解できるように、単純明快な挿絵とくだけた表現の台詞で語った作品である。



GEHÖRT DAS SO??!

(どうして?!: エルビスの物語)

by Peter Schössow © Carl Hanser Verlag
München Wien 2005

ノルウェーの *Eg kan ikkje sove no*¹⁷ (ぼくは今眠れない) もまた、死の受容というテーマに独創的なアプローチで迫った絵本である。ある冬の晩、少年は父親の腕に抱かれ外に出る。静けさと闇に包まれた世界は、家に帰ってきた最後の場面で一転し、鮮やかな朱色がページ全体に大きく広がる。紙製のジオラマを使った奥行きのある背景、時間的・地理的な距離が無化された白い世界を舞台に、黒と白を基調とし、朱色をポイントに使うことで、母親を亡くした悲しみ、父子の心理的な結び付きに光を当てている。画家のエイヴィン・トシェッテル (Øyvind Torseter, 1972-) は、2014年に、国際アンデルセン賞画家賞最終候補に選ばれた。

こうした絵本では、絵が重要な役割を担い、死という漠然とした概念に明確なイメージを与えつつ、物語を前に引っ張る働きをしている。絵本を読むとき、子どもはそれぞれのレベルに応じて絵を読み解き、物語の背景や登場人物の気持ちを理解する。文章が必要以上に多くを語らず、読む者の想像力に委ねる絵本は、読者が自ら意味を構築し、登場人物の抱える葛藤を自分のものとして受け止め、自分の物語

¹⁷ Lunde, Stein Erik. *Eg kan ikkje sove no*. Illus. Øyvind Torseter. Oslo: Norske Samlaget, 2008. <請求記号 Y17-B12105> ドイツ児童文学賞絵本部門2011年ノミネート。

として捉える余地を残しているのである。

ベルギー出身の絵本作家たち

ベルギーに生まれたキティ・クロザー（Kitty Crowther, 1970-）は、『ちいさな死神くん』¹⁸（*La visite de petite mort*, 2004）等の絵本で、死を題材にしている。*Annie du lac*¹⁹（湖のアニー）の主人公アニーは、母親を亡くし、孤独な日々を送っている。ある晩、息苦しさを感じて目覚めたアニーは、湖に飛び込む。直接の言及はないものの、「身のまわりのものに別れを告げた」という文章や、足に重りをつけた挿絵から、自殺を試みたのは明らかである。生と死、現実とその向こう側の世界が入り混じるかのように、庭や部屋にも、湖の中と同じ植物が描かれている。ア



Annie du lac
（湖のアニー）

ニーを助けたのは、湖に浮かぶ島のように見えた3人の巨人だった。巨人は、大人になるまでにお嫁さんを見つけないと、恐ろしいことが降りかかる定めにあった。アニーは巨人を海まで案内し、二人の巨人は、海にいた巨人の女を妻に選んだ。アニーのそばにとどまった残りの一人は、「恐ろしい呪い」によって幸運にも人間に変わり、アニーと結ばれる。

流れるように連続して起きる出来事を、主人公と共に体験する直線的なプロット、「試練と願望の成就」「嫁探し」「変身」のモチーフ、「非現実的な力によって奇跡的にもたらされるハッピーエンド」という、古典的なおとぎ話の特徴²⁰を強く感じさせる。この作品は現代のおとぎ話として、時代や場所を限定しない普遍性を持つ一方、人が生きる上での孤独や絶望という、古典的なおとぎ話にない要素がリアリ

¹⁸ キティ・クロザー、ちいさな死神くん、ときありえ訳、東京：講談社、2011。

<請求記号 Y8-N11-J204>

¹⁹ Crowther, Kitty. *Annie du lac*. Paris: École des loisirs, 2009. <請求記号 Y17-B11808>
『ホワイト・レイプンス』2010年収録。

²⁰ シャルlotte・ビュラー、昔話と子どもの空想、森本真実訳、こどもとしょかん、1999、夏（82）、p.2-19。<請求記号 Z21-1003>

ティを生み、現代の読者に通じる物語になっている。そもそもおとぎ話は、人間や世界の普遍的な姿を表したものの²¹であり、おとぎ話で描かれる死は、しばしば「心理的な死と再生」の象徴として解釈されてきた²²。この作品では、自ら命を絶つ描写やアニーの深い悲しみが、「心理的な死を経て新しく生まれ変わる」というおとぎ話の一つのテーマを、現代の文脈に引き寄せている。死や現実の厳しさをおとぎ話と結び付けて語る試みを成功させたのは、物語を紡ぐ作者の豊かな力量である。現実のバールの向こう側にある世界の美しさを、垣間見せる作品である。

ベルギーの画家であるメラニー・リュタン (Mélanie Rutten, 1974-) は、クローザーの指導を受けた経歴を持ち、水彩絵の具や色鉛筆を用いた柔らかな色合いは、クローザーの技法と類似している。*Öko: Un thé en hiver*²³ (エコ: 冬のお茶) では、友人を亡くしたカエルが、木の根元に置かれたお茶を見つける。吹雪の中ほら穴に逃げ込むと、明かりを携えて奥から現れたのは、イエティ(雪男)だった。地下のトンネルや洞窟のような暗く狭い場所は、「子どもとしての人生を一度終え、新しく生まれ変わる」ことの象徴とも考えられる²⁴。吹雪で危険な体験をしたカエルは、ほら穴に入るという行動に象徴される心理的な死を経て、人生の次の段階に進み、新しい友人とともに春を迎える。自然の移り変わり人と人の一生を重ね、大切な人の死の後、新たな人間関係を築く姿を描いた物語は、クローザーの『ナイナイとしあわせの庭』²⁵ (*Moi et Rien*, 2000) を思い出させる。

21 マックス・リュティは、「昔話というガラス玉のなかに世界がうつつている」と述べている。

小澤俊夫、昔話の語法。東京：福音館書店，1999。〈請求記号 YU21-5〉

22 ベッテルハイムは、白雪姫を「子ども時代の死」という視点から分析している。ブルーノ・ベッテルハイム、昔話の魔力。波多野完治、乾侑美子共訳。東京：評論社，1978。〈請求記号 KE178-20〉

23 Rutten, Mélanie. *Öko: Un thé en hiver*. Nantes: MeMo, 2010.

〈請求記号 Y17-B13362〉 『ホワイト・レイプンス』2012年収録。

24 フロイト派による『不思議の国のアリス』の初期の分析では、うさぎ穴に落ちていく場面に性的な意味が与えられている。(定松正編、ルイス・キャロル小事典。東京：研究社出版、1994) また洞窟は、異界の入り口となることもある。広瀬寿子の『ほくらは「コウモリ穴」をぬけて』(『ホワイト・レイプンス』2009年収録。)では、洞穴内のコウモリの産室を通じて、少年が死んだ母親に再会する。

25 主人公は荒れ果てた庭に、死んだ母親の好きだった花の種を蒔く。美しくよみがえった庭を見て、悲しみに閉じこもっていた父親は、再び娘に心を開く。キティ・クローザー、ナイナイとしあわせの庭。平岡敦訳。東京：徳間書店，2002。〈請求記号 Y18-N02-194〉

死の表象——死神、その他の姿

前述の『死神さんとアヒルさん』、『ちいさな死神くん』、スイスのユルク・シュービガー (Jürg Schubiger, 1936-) が文章、ドイツのロートラウト・ズザンネ・ベルナー (Rotraut Susanne Berner, 1948-) が挿絵を手掛けた *Als der Tod zu uns kam*²⁶ (死神が私たちのところに来たとき) のほか、ドイツの *Die schlaue Mama Sambona*²⁷ (かしこいママ・サンボーナ)、オーストリアの *Die kleine Sensesfrau*²⁸ (小さな死神の娘) 等の絵本には、個性豊かな死神像を見ることができる。

オーストラリアのマークース・ズーサク (Markus Zusak, 1975-) の『本泥棒』²⁹ (*The Book Thief*, 2006) は、第二次世界大戦中のドイツが舞台である。心優しい死神が語り手として登場し、悲惨な状況を描写する。多くの人が苦しみの中を生きた時代には、死さえも救いであり、もはや「神」は「死神」の形をとるしかないほど、痛ましい出来事が次々に起きる。しかしそんな状況下でも、主人公は養父に字を習い、家にかくまうことになったユダヤ人青年の語る物語を愛し、防空壕で本を朗読し、自分の物語を書く。死神は、言葉に生かされる少女や、人間らしい生き方を貫いた者、他者への思いやりを持ち続けた者に目を留める。この作品では、死神は死をもたらすだけの存在ではなく、瓦礫の中に最後まで残る人間性を照射している^{ヒューマニティー}のである。

死という漠然とした概念に形を与えるために、文学では様々な表象が用いられてきた。ドイツのユッタ・リヒター (Jutta Richter, 1955-) の『川かますの夏』³⁰ (*Hechtsommer*, 2004) では、川かますが物語の鍵になっている。川かますの神

²⁶ Schubiger, Jürg. *Als der Tod zu uns kam*. Illus. Rotraut Susanne Berner. Wuppertal: Peter Hammer, 2011. <請求記号 Y17-B13545> 『ホワイト・レイプンス』2012年収録。

²⁷ Schulz, Hermann. *Die schlaue Mama Sambona*. Illus. Tobias Krejtschi. 2007. 3rd ed. Wuppertal: Peter Hammer, 2008. <請求記号 Y17-B10010> 『ホワイト・レイプンス』2008年収録。ドイツ児童文学賞絵本部門2008年ノミネート。

²⁸ Stavarić, Michael and Dorothee Schwab. *Die kleine Sensesfrau*. Wien: Luftschacht, 2010. <請求記号 Y17-B14217> 『ホワイト・レイプンス』2011年収録。

²⁹ マークース・ズーサク. 本泥棒, 入江真佐子訳, 東京: 早川書房, 2007. <請求記号 KS178-H12> ドイツ児童文学賞青少年審査員賞2009年受賞。青少年審査員賞は、全国の6つの青少年の読書クラブが選ぶ賞である。

³⁰ ユッタ・リヒター. 川かますの夏, 古川まり訳, 東京: 主婦の友社, 2007. <請求記号 Y9-N07-H312> 『ホワイト・レイプンス』2005年収録。

様を釣れば、母親の病気が治るのではないかと考えたダニエルは、魚を捕まえようとするが、生き物を殺すことに嫌悪感を抱くアンナは、それを止めようとする。ダニエルは巨大な川かますとの対決の中で、母親が死につつある現実と向き合う。アンナは無力感を感じつつ、少し離れた場所から見守る。作者は鋭い感性で、登場人物の心の動きを丁寧に拾い上げながら、非情な時の流れと子ども時代への追憶を浮き彫りにした。子どもたちの目におぞましいものとして映る川かますは、死の不可解さや恐ろしさを表している。

英国のパトリック・ネス (Patrick Ness, 1971-) の『怪物はささやく』³¹ (*A Monster Calls*, 2011) では、主人公の孤独、恐れや怒りが、怪物との対時に表される。闘病中の母親と暮らすコナーの元に、真夜中の決まった時間にイチイ³²の怪物が現れ、三つの物語を聞かせ、コナーが自ら4番目の物語を語るよう迫る。怪物はコナーを癒すために来たのだと明かされると、はじめは答えの出ない問いをぶつけ、コナーの存在を脅かした怪物は、彼を支えるものへと変わる。怪物のイメージの変容はコナーの心の変化であり、母親の死に向き合う過程を映し出している。

喪失を越えて

大切な人を失ったとき、その体験や自らの想いを語ることは、死や喪失を受容し人生を見つめ直す助けになる。フィンランドの絵本『木の音をきく』³³ (*Tyttö ja naakkapuu*, 2004) では、父親を亡くし、別の町に引っ越すことになった少女が自身の想いを語る。英国のデイヴィッド・アーモンド (David Almond, 1951-) の『ミナの物語』³⁴ (*My Name is Mina*, 2010) の主人公は、亡くなった父親に伝えたいことをノートに記す。

親しい人との死別は、時に自己の存在の危機をもたらす。エヴァン・クールマン

31 パトリック・ネス. 怪物はささやく. シヴォーン・ダウド原案. 池田真紀子訳. 東京: あすなろ書房, 2011. <請求記号 Y9-N12-J2> ドイツ児童文学賞児童書部門2012年ノミネート. 青少年審査員賞受賞。

32 イチイは、英国の教会の墓地でよく見ることのできる木である。

33 リーッタ・ヤロネン. 木の音をきく. クリスティーナ・ロウヒ絵. 稲垣美晴訳. 東京: 猫の言葉社, 2012. <請求記号 Y18-N12-J314> 『ホワイト・レイブンス』2005年収録。

34 デイヴィッド・アーモンド. ミナの物語. 山田順子訳. 東京: 東京創元社, 2012. <請求記号 Y9-N12-J288> ドイツ児童文学賞児童書部門2012年ノミネート。

(Evan Kuhlman) の *The Last Invisible Boy*³⁵ (透明になった最後の少年) は、父親を事故で亡くした後、突然身体の色が薄くなり、日に日に消えていく少年が、日記の形でつづる物語である。父親のことを考えるたびに、少年は胸を痛めたり、温かな思い出に包まれたりしながら、家族や友人との交わりの中で元の色を取り戻す。愛する人の欠けた世界は、それまでとは全く異なる場所である。残された者はそこで生きていくために、自身を造り変える必要がある。さなぎが自分の体を溶かし、蝶に変わる過程にも似て、人もまた変わりながら、新たな世界に馴染んでいかねばならない。日記という自分自身の物語を通して、少年は生き方を模索し、父親の死を意味付けていく。

有限の命を生きる人間は、生の全体の在り様を捉えるために、物語を必要とする。はるか昔から今日に至るまで物語は人と共にあり、様々な形でその歩みを支えてきた。たとえば神話は、歴史を越えた時間軸の中で人間の普遍的な姿を明らかにし、日常の中により深い世界が立ち現れるマジックリアリズム³⁶の物語は、現実とは異なる枠組みで世界を理解する可能性を開いた。

神話やマジックリアリズムの要素が絡み合い、喪失の先にある救いや希望を描き出した作品として、オーストラリアのソーニャ・ハートネット (Sonya Hartnett, 1968-) の *The Ghost's Child*³⁷ (幽霊の子ども) を次に紹介する。

老婦人マチルダは、自分の過去——裕福な家での孤独な子ども時代、「世界で一番美しいものは何？」という父の問いに答えるために世界を旅したこと、彼女の下に美しい妖精が来たが、すぐに死んでしまったこと、海鳥のような青年と愛し合ったものの、彼は自然の中での自由な暮らしを望んだこと、青年と別れた後、「一度知った愛を失い、どうやって生きればよいの？」と彼に尋ねるため、再び航海の旅に出たこと、戦争で視力を失った人を助ける眼科医になったこと——を家にやって

³⁵ Kuhlman, Evan. *The Last Invisible Boy*. Illus. J.P. Coovert. New York: Atheneum Books for Young Readers, 2008. ドイツ児童文学賞児童書部門2011年ノミネート。

³⁶ 現実と幻想・夢・神話が渾然一体となった世界を創り出す手法。

³⁷ Hartnett, Sonya. *The Ghost's Child*. Camberwell: Viking, 2007.

<請求記号 Y8-B8715> 2010年に IBBY オナーリスト (IBBY Honour List) に選ばれた。これは、国際児童図書評議会 (International Board on Books for Young People: IBBY) の各国支部が、自国で新しく出版された児童書の中から、海外に紹介したい作品を選んだ推薦図書リストであり、隔年ごとに作成される。

来た謎の少年に語ってから、少年に導かれ死後の世界に旅立つ。

物語中に登場する「ペルセウス」という名の飼い猫や、西風の神ゼピュロスは、作品に神話的な味わいを添えている。また、この作品は、現実と幻想が入り混じるマジックリアリズムの要素を持ち、青年がセルキー³⁸のような姿を見せる場面がある。ナルガン³⁹はマチルダの友として悩みを受け止め、伝説の海獣が暴れる海では、言葉を話す魚が行く手を示す。せっかく手にした妖精は死んでしまい、心から愛した青年は去って行き、手に入らないものを求め続ける人生は、喪失の連続である。しかし空想に美しく彩られた世界で、勇気を持って自分の歩むべき道を選ぶ姿は、この世に生きる喜びをすがすがしく伝える。一人の人間の死を描くことは、「その人がどう生きたか」を考えることである。人を愛することの痛みと尊さを知り、世界の美しさに目を開かれるマチルダの生き方は、児童文学に本質的に備わった、人生や世界を肯定する価値観を強く感じさせる。

児童文学は、本来、大人が既に経験していることを、子どもの読者に伝えるものだが、死は大人にとっても未知の領域であり、いつか必ず死ぬという事実は、大人も子どもも変わらない。これまで様々な国の書き手が、多様な文学的・絵画的アプローチで、死の問題に取り組んできた。死を描いた児童文学は、「死とは何か」という問題とともに、「死をどう受け止めて、自分のものとして考えていくか」、「いかに生きていくのか」という大きな問いを投げかけている。

(なかの れいな 企画協力課非常勤調査員)

³⁸ 英国北部の島の伝説に伝わる、アザラシの毛皮をまとった妖精。しばしば人間と夫婦になる。

³⁹ オーストラリアの先住民民族アボリジニの伝説に伝わる岩の精霊。

在外研究報告：欧州の児童書専門機関の取組について

平澤 大輔

はじめに

国際子ども図書館は、国立の唯一の児童書専門図書館として、子どもの読書活動推進の現場の参考となるよう、「学校図書館との連携による学習支援プロジェクト」や「中高生向け調べものの部屋の準備調査プロジェクト」といった調査研究プログラムを実施し、刊行物「国際子ども図書館調査研究シリーズ」に成果をまとめて報告している。

また、現在は、平成27年度に予定されている増築棟の完成による施設拡充を機に、児童書に係る資料・情報センターとしての機能の更なる高度化に向けて、今後の調査研究事業の在り方について検討を進めている。筆者は、その検討に資するため、2014年2月9日から3月7日までの約1か月にわたり、ノルウェー、スウェーデン、ドイツ、フランスの4か国にそれぞれ約1週間滞在し、児童書の研究機関や、児童サービスに積極的に取り組んでいる図書館など、本と子どもをつなぐ活動を行う施設を数多く調査した。本稿では、特に児童書に関する調査研究及び調査研究支援事業に取り組んでいる四つの機関について、最新の動向を紹介する。

ノルウェー児童書研究所

ノルウェー児童書研究所 (Norsk Barnebokinstituttet) は、1979年にオスロに設立された児童書専門機関である。現在は10名の職員によって運営されており、そのうち2名は非常勤職員として勤務している。2014年度の予算は1,020万ノルウェークローネ (2014年9月4日現在、1ノルウェークローネ=約17円。) で、そのおよそ9割をノルウェー文化省から得ている。

同研究所の業務は、①インターネット等を通じた児童書に関する情報提供及び展示会の企画・実施、②児童書に関する研修の実施、③児童書に関する調査研究の三つに大別されるが、組織の中で厳密に部門が分かれているわけではなく、いずれの職員も複数の業務を担当している。

ノルウェー児童書研究所は設立以来、国内で出版された児童書のほとんどを所蔵す

る図書館として機能を果たしてきた¹。しかし、同研究所を始めとする、様々な分野の専門機関がそれぞれ所蔵していた資料を国立図書館(Nasjonalbiblioteket)に集約し、専門知識を持つ職員を同館に配置するという国の方針が立てられた。そのため、2012年に同研究所の全ての所蔵資料が国立図書館に移管されるとともに、同研究所の2名の職員も、児童書の研究司書として国立図書館の職員となった。現在は、国立図書館が所蔵する児童書のうち、直近3年の間に国内で出版された児童書のみがノルウェー児童書研究所内で開架され、残りの資料は隣接する国立図書館の書庫に保管されている。また、そのほかに、それほど数は多くないものの、英語やドイツ語を中心に、児童書研究に有用と思われる関連書を独自に購入し、利用に供している。

ノルウェー児童書研究所では、児童書について様々な研究を行っており、現在、映画やゲームといった児童書のマルチメディア化や、連続テロ事件²が児童書に与えた影響などをテーマとして研究が行われている。また、前年にノルウェーで発行された児童書に関する統計³を毎年作成し、出版点数の推移といった分析も行っている。これらの研究は主に、同研究所の職員と、外部の15名の研究者によって行われており、グループで研究を行うこともあれば、個人で行うこともあるという。

調査研究の成果は、同研究所のウェブサイト⁴を通じて広く一般に公開している。また、文化評議会(Kulturrådet)⁵から財政的な援



研究者のために設けられた専用スペース

- 1 ノルウェー児童書研究所では、1979年に国内の出版社との間で交わした、児童書を出版した際に、同研究所に無償で2部納めるという取決めに基づき、国内の児童書の網羅的な収集を進めてきた。
- 2 2011年7月22日にオスロで爆破事件と銃乱射事件が連続して発生した。労働党の青年部のキャンプに参加していた若者など、両事件を合わせて77人の死者を出した。
「乱射屈せず、萎縮せず ノルウェー連続テロから1年」『朝日新聞』2012.7.20, p.10.
- 3 http://barnebokinstituttet.no/biblioteket/statistikk_for_barne_og_ungdomslitteratur (accessed 2014.4.25)
- 4 <http://barnebokinstituttet.no/> (accessed 2014.4.25)
- 5 芸術文化に対する助成を中心とした文化政策の執行を担う、政府から独立した専門機関。

助を得て、ノルウェー語、スウェーデン語、デンマーク語及び英語で執筆された児童文学に関する学術論文を掲載するオンラインジャーナル *BLFT : Barnlitterært forskningstidsskrift*⁶の発行も2010年から行っている。しかしながら、同研究所の職員によると、ウェブサイトを通じて公開している研究の成果が、広く活用されているとは言い難い状況であり、より効果的な情報の発信方法を現在も模索しているところであるとのことであった。

このほか、児童書に関する調査研究を支援する取組として、施設内に、研究者や学生が利用できるスペースを設け、児童書や関連書といった資料に加えて、専用のデスクや棚、パソコンなどを自由に利用できる環境を提供している。

スウェーデン児童書研究所

スウェーデン児童書研究所 (Svenska barnboksinstitutet) は、青少年のための文学に興味を持つ人のための情報センターとして1965年にストックホルムに設立された。スウェーデン出版協会、スウェーデンイラストレーター協会、スウェーデン作家連盟及びストックホルム大学で構成する財団によって運営され、スウェーデン文化省からも財政的な支援を受けている。同研究所には司書が4名と研究者が1名おり、加えて総務と経理を担当する職員がそれぞれ1名勤務している。

研究所内の図書室は一般に開放しており、年間で約2,500名が利用している。主な利用者は、児童書を研究する学生や研究者である。同研究所は、国内で発行される全ての児童書を収集するほか、国外で発行されるスウェーデンの児童書の翻訳書や、児童書に関する国内外の研究書の一部も収集している。所蔵資料のうち、児童書は館内での利用に限定されるが、研究書については、館外への貸出しも行っている。国立図書館 (Kungliga biblioteket) をはじめ、大学図書館や一部の公共図書館が参加する、“Libris” という総合目録を用いており、児童書の目録作成は、納本制度に基づき、国内で出版された全ての資料が納められる国立図書館が行い、その後、同研究所が件名を追加で入力するという形で分担している。

スウェーデン児童書研究所では、*Barnboken - Journal of Children's Literature*

⁶ <http://www.childlitaesthetics.net/index.php/blft/> (accessed 2014.4.25)



研究所内の図書室

Research という論文誌を1977年から発行している。世界中の研究者から投稿された、児童文学に関する学術論文を掲載しており、過去には冊子体として発行していたが、2010年からはオープンアクセスジャーナルとしてデジタル版のみを発行し、ウェブサイト⁷で公開している。この論文誌の発行については、スウェーデン・リサーチ・

カウンシル (*Vetenskapsrådet*) から資金の援助を受けている。また、1971年から様々な出版社と協力して、児童書研究者が執筆する専門書シリーズを発行しており、2014年にはシリーズ124作目として、エルサ・ベスコフ賞を受賞したスウェーデンの絵本作家エヴァ・ピロウ (*Eva Billow*) に関する研究書⁸を出版した。

スウェーデン児童書研究所では、前年に国内で発行された全ての児童書を対象に毎年、統計調査を実施している。約1,700冊もの児童書に目を通すため、多大な労力と時間を要するものの、発行タイトル数の増減や、扱われるテーマの移り変わりなどに関する分析は、児童書研究の基礎資料として多くの研究者に用いられるほか、新聞やテレビといったメディアによってもしばしば利用されており、同研究所のプレゼンスの向上に貢献しているという。この調査に関連して、毎年3月に、ブック・テイスティング (*Bokprovning*) と題し、一般向けの、職員や外部講師による最近の児童書の傾向に関する講義や、前年に出版された児童書の展示などを行っている。

このほか、毎年、春や秋を中心に、研究者等を招いて児童書に関する講演会を年間で10回以上開催している。参加者の多くは学生や研究者、学校の教員、図書館職員などであるという。また、ヨーテボリで開催されるブックフェアにも毎年参加しており、2013年にはボローニャ・ブックフェアにおいても、スウェーデンの児童書に関するセミナーを開催した。

⁷ <http://www.barnboken.net/index.php/clar/index> (accessed 2014.4.25)

⁸ Elina Druker. *Eva Billow : bilderbokskonstnär och författare*. Göteborg: Makadam, 2014, 239p.

ミュンヘン国際児童図書館

ミュンヘン国際児童図書館 (Internationale Jugendbibliothek) は、ユダヤ系ドイツ人のイエラ・レップマン (Jella Lepman, 1891-1970) によって1949年に設立された、世界最大規模の児童書専門図書館である。15世紀に建てられたブルーテンブルク城に、図書約60万冊、雑誌約6,600冊、非図書資料約2,600点を所蔵し、年間15,000冊から19,000冊程度の資料を受け入れている。同館の蔵書は、原則として出版社からの寄贈で成り立っており、1部目は研究用、複数冊の寄贈があった場合は、2部目以降を貸出用としている。蔵書は、研究図書室と貸出図書室の二つの図書室で一部が開架されており、そのほかは、館内地下の書庫と、外部に2か所ある書庫に保管されている。2013年の来館者数はおよそ45,300人、そのうち子どもは27,400人で、研究図書室と貸出図書室の利用はそれぞれ約1,100人と約15,000人であった。

研究図書室の主な利用者は、研究者や学生のほかに、児童書の作家や画家、翻訳家など様々で、児童書の出版関係者が利用することもあるという。ここでは、ミュンヘン国際児童図書館が所蔵するほぼ全ての資料が利用できるほか、デスクやパソコンに加え、コピー機や無線 LAN などの設備も整っている。また、研究図書室の利用者に対するレファレンスサービスも提供しており、研究テーマに関連する資料の調査や、関連機関の紹介などを行っている。

同館では、研究図書室の利用者による研究の把握にも積極的に取り組んでいる。研究者や学生に対しては、研究の成果を刊行物として出版した際に、同館に送付してもらおうよう依頼している。これらは当然、全く強制力のない依頼に過ぎないが、

実際には、多くの利用者が依頼に応じている。これにより、同館の所蔵資料を用いてどのような研究が行われているか、ある程度把握することができているという。

また、同館の所蔵資料を用いて研究を行うことを条件に、年間を通じて世界各国から研究奨学生を受け入れている。奨学金はドイツ外務省から支給さ



貸出図書室



研究図書室

れ、同館では、研究環境の提供及び滞在中の住居の斡旋等のサポートを行っている。研究奨学生は、児童文学の研究者をはじめ、図書館員や教員、翻訳家など多岐にわたり、3か月に1回、館長室において定期的開催されているラウンドテーブルにおいて報告を行う。このラウンドテーブルには、館長のほかに、同館の各部門の職

員も参加し、研究奨学生と職員の間で、様々なテーマにわたる児童書研究の動向を共有する貴重な場となっている。

ミュンヘン国際児童図書館が毎年行っている、国際推薦児童図書目録『ホワイト・レイブンス』(*The White Ravens*)の作成も、注目すべき事業の一つである。30言語50か国を超える児童書の中から、独創的なテーマを扱っていたり、デザインの質が高い、特に優れた250作品を同館が選定し、注釈と共に掲載している。2010年からは関連事業として、「国際児童・ヤングアダルト文学のためのホワイト・レイブンス・フェスティバル」(*White Ravens Festival für Internationale Kinder- und Jugendliteratur*)を隔年で開催しており、世界中から児童文学作家を招いて、講演会やワークショップなどを行っている。3回目を迎える2014年のフェスティバルは、2014年の国際アンデルセン賞にノミネートされたフランスのジャン=クロード・ムルルヴァ(Jean-Claude Mourlevat)をはじめ、アイルランドや南アフリカ、コロンビアなど、10か国から総勢15名の児童文学作家をゲストに迎え、7月19日から24日までの6日間にわたって開催された。

このほか、2007年まで刊行していた年報 *IJB-Report* をリニューアルし、より研究報告に重きをおいて2008年から刊行を開始した *Das Bücherschloss* には、展示会やホワイト・レイブンス・フェスティバルなどの活動報告に加え、職員がイベントの企画運営を通して得た知見を紹介する記事や、外部の研究者による研究報告なども掲載されている。

国立児童書センター「本のよろこび」

1965年に、フランスの児童書研究の中心としてパリに設立された国立児童書センター「本のよろこび」(Centre national de la littérature pour la jeunesse - La Joie par les livres) は、2008年1月にフランス国立図書館(Bibliothèque nationale de France)に統合され、現在は同館の文学・芸術部門に属する一組織となっている。同センターは、①本や読書、文化への子どもたちのアクセスを促進すること、②毎年出版される様々な児童書の中から良質な作品を選び普及に努めること、③フランスで出版された全ての児童書を保存し、それらへのアクセスを保障すること、④児童書に携わる人、特に読書の推進に取り組む専門家に対して、必要な情報やトレーニングの機会を提供すること、という四つの使命の下で、現在約25名の職員によって運営されている。

国立児童書センターの30万冊を超える蔵書は、1960年代以降にフランスで出版された全ての児童書のほか、フランス語圏(特にサハラ以南のアフリカ諸国及びアラブ諸国)を中心とする国・地域で出版された児童書や、児童文学に関する研究書などで構成されている。フランス国立図書館の本館(フランソワ・ミッテラン館)内にある児童書研究室(Haut-de-Jardin)では、児童書や関連書、青少年向けの雑誌など約3万冊が開架されており、書庫内資料も閲覧申込みをすれば利用できる。児童書研究室の利用は、その他のフランス国立図書館の研究室と同様に原則16歳以上からであるが、週末のみ、保護者が同行している場合に限り、16歳未満の子どもの利用も認められている。

児童書の調査研究に関する取組は、国立児童書センターが特に力を入れている事

業の一つである。同センターが主体的に行っている研究として、まず、児童書に関する様々な刊行物の出版が挙げられる。同センター設立と同じ1965年創刊の児童書専門誌 *La Revue des livres pour enfants* は年に6回発行され、新刊の児童書のレビューや児童書に関する国内外の情報、児童書作家のインタビューなどを掲載している。



フランス国立図書館 本館

2012年2月に発行された263号では日本の児童文学を特集しており、大阪国際児童文学振興財団理事長の三宅興子氏、絵本研究家の広松由希子氏、武蔵野大学教授の宮川健郎氏などが、日本の児童文学や絵本について紹介する記事を寄稿している。また、毎年11月に発行する号は、“*Sélection annuelle*”と題して、前年度に発行された児童書の中から特に優れた作品約800点を紹介する特別号となっている。

1989年創刊の *Takam Tikou* は、サハラ以南のアフリカ諸国やアラブ諸国、カリブ諸国及びインド洋の国々といったフランス語圏の国や地域における、児童書や子どもの読書に関する情報を掲載しており、同センターのウェブサイト⁹でPDF版が公開されている。同誌は、2008年までは冊子体が作られていたが、2010年からはオンライン版のみとなった。

また、大学や学会と連携して、児童書研究に関するセミナーを毎年開催している。2012年は児童文学に描かれた戦時下の子どもを、2013年はモーリス・センダックをテーマとした。2014年はパリ大学と共同で、「紙の本から電子書籍へ」というテーマで開催する予定である。このほかにも、児童文学研究者を招きシンポジウムを開催して記録を刊行したり、あるいは子どもから大人まで、児童文学に興味を持つ一般人を対象に、主に児童文学史の研究者を招いて、自身の研究について分かりやすく紹介してもらう「遺産の朝」(*Matinées du patrimoine*)というイベントを開催したりしている。

研究支援の取組としては、児童文学研究者の受入れが挙げられる。フランス国立図書館では、同館の蔵書を利用した研究を行う研究者の募集を毎年行っており、その枠組みの中で、毎年1名から2名、児童文学の研究者の受入れを行っている。彼らに対しては、専用のデスクやパソコンといった研究環境を提供するほか、資料へのアクセスについて職員同様の権限を付与し、研究に関連する範囲に限って、フランス国立図書館のイントラネットや所蔵資料の自由な利用が可能となっている。このほかにも、同センターの職員が、研究者や学生から、研究テーマに関して質問を受けたり、ディスカッションを行ったりすることもあるなど、児童書研究に携わる人たちに対して、積極的な支援を行っている。

⁹ http://lajoieparleslivres.bnf.fr/masc/integration/joie/statique/pages/06_revues_en_ligne/062_takam_tikou/takamtikou-sommaires.htm (accessed 2014-04-25)

在外研究を終えて

これまでに紹介した各機関は、いずれもその国における児童書研究の中心的な役割を果たしており、大学など児童書の研究に取り組む他機関と広範なネットワークを築きつつ、主体的に、あるいは間接的に、児童書の調査研究に取り組んでいる。それらの成果は、ウェブ上での情報発信や各種イベントの開催を通じて、広く一般に還元されている。自国で出版された児童書の網羅的な収集を行っていたり、図書館員や児童書に興味を持つ一般の人を対象に研修や講演会を開催したりするなど、これらの機関は当館と共通する部分も多く、彼らの児童書研究に関する取組は、今後の国際子ども図書館の調査研究事業を検討する上で、参考にすべき点が非常に多い。

例えば、前述のとおりノルウェー児童書研究所では、連続テロ事件が児童書に与えた影響について研究を行っているが、現在、国際子ども図書館では、3階のミュージアムで開催中の展示会「日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」の中の特別コーナー「21世紀の子どもの本」において、「3.11以降の絵本」というテーマで資料を紹介している。この取組を更に敷衍すれば、専門家の監修の下で「東日本大震災と児童書」に関して研究を行うことも可能であろう。図書館が日々行う業務の中に、調査研究の端緒があるということを、各機関の見学やインタビューを通じて認識することができたことは、大きな収穫の一つである。

児童書の資料・情報センターとして、児童書研究や子どもの読書に関わる機関と連携しながら、調査研究の実施や支援に更に積極的に取り組むことは、国際子ども図書館に期待される役割の一つである。今回の在外研究で得た知見を、様々な機会に共有し、国内外における児童書の調査研究の更なる発展に、少しでも寄与することができれば幸いである。

最後に、本稿では4機関の取組の紹介に限られたが、今回の在外研究では20を超える機関を訪問し、そのいずれにおいても、貴重な示唆を得ることができた。この場を借りて、御協力いただいた関係者の皆様に、改めて感謝の意を表し、厚く御礼申し上げます。

(ひらさわ だいすけ 企画協力課)

国際子ども図書館で行う

「ちいさな子どものためのわらべうたと絵本の会」

大森 尚美

♪に一ぎり ぱっちり たてよこ ひよこ♪ ピヨピヨピヨ… ひよこが生まれました！歌い終わると同時に、握っていた両手を開くと、中から黄色いシフオンの布が、ふわふわと現れます。すると、集まっていた赤ちゃんだけでなく親たちからも、わあーっという歓声が上がります。

「ちいさな子どものためのわらべうたと絵本の会」について

国際子ども図書館では、毎月第2水曜日と第3土曜日の午前11時から、1階のおはなしのへやで、「ちいさな子どものためのわらべうたと絵本の会」(以下、「わらべうたの会」)を行っています。所要時間は約30分です。6か月以上3歳以下の子どものとその保護者を対象とし、国際子ども図書館児童サービス課の職員がわらべうたと絵本の読み聞かせを行っています。これは、平成16年4月から始まった「ちいさな子どものための絵本の時間」を引き継ぐもので、平成26年でちょうど10年目を迎えました。参加は事前予約制ですが、すぐに満員になってしまうほどの盛況ぶりです。

なぜ図書館でわらべうたの会をするのか

小さな子どもに絵本を楽しんでもらうためには、まず、子どもが絵本を読んでもくれる人の声を心地よいと感じて、耳を澄まして聞いてくれるような関係作りが必要です。わらべうたは、昔から日本で歌い継がれてきた子どものための歌で、言葉の響きの美しさや面白さがたくさん詰まっています。子どもは、言葉の意味を理解できなくても、すぐに、そのリズムに反応してわらべうたを楽しんでくれます。それを一番身近な親が歌ってくれ、体を触れ合いながら一緒に楽しめるということは、子どもにとってどんなに心地よい体験でしょう。実際に「わらべうたの会」を担当していると、わらべうたを楽しんで、人の声を聞く心地よさを体験した子どもは、自然と絵本を読む声にも耳を傾けてくれると感じることがよくあります。

児童文学の研究者である瀬田貞二さんも、「小さいときから見事な言葉を聞いて育った人間は、やはり言葉に対しての感覚が鋭くなっていく…（略）…、童唄はとても大切だ。」¹と書いています。

また、乳幼児の発達や親子の関係という観点から、堀川照代さんも「わらべうたは母語を育てる…（略）…母語は子どもの生涯に渡る言語生活の基礎を築く。図書館の乳幼児サービスには、わらべうたが欠かせない」²とっており、現在、図書館の乳幼児サービスにわらべうたを取り入れているところもあります。

「わらべうたの会」のプログラム

わらべうたと絵本の読み聞かせを組み合わせ、1回に全部で十数種類の演目を行います。毎回、構成や演目にバリエーションを持たせるよう工夫しています。

●よく歌うわらべうた

最初に、「にぎりぱっちり」など、参加者の注目を集めやすいわらべうたを歌います。それから、赤ちゃんの顔や手足を触ったり、くすぐったりするわらべうたを歌います。「ここはどうちゃんにんどころ」というわらべうたでは、うたを歌いながら、赤ちゃんの顔にやさしく触れていき、最後にこちょこちょとのどをくすぐります。すると、へや中に赤ちゃんの笑い声が上がってきます。体を動かすわらべうたには、「おふねはぎつちらこ」などがあり、子どもを親の膝の上に座らせ、歌いながら、親子が一緒に体を動かすのでよいスキンシップになります。その他、色とりどりのシフォンの布を配り、その布を動かして遊ぶ「じーじーばあ」という、いないいないばあ遊びの歌もあります。また、季節に応じて、参加者全員で輪になって歌いながら遊ぶわらべうたも取り入れています。冬至の時期などには、「おらうちのどてかぼちゃ」を歌いながら、かぼちゃを順番に回して遊びます。合間に絵本の読み聞かせをする場合は、直前に、「おやゆびねむれ」など静かになるわらべうたを歌ったりしますが、気

¹ 瀬田貞二『幼い子の文学』中央公論新社 1980 p.101

² 堀川照代『児童サービス論』日本図書館協会 2014 p.177

持ちよくなって本当に眠ってしまう赤ちゃんもいます。最後は、「さよならあんころもち」というわらべうたをよく歌います。手であんころもちの形を作って、ぱくっと食べておしまいです。

●よく読む赤ちゃん絵本

『でてこいでてこい』や『くだもの』など動物や食べ物などが出てくる絵本や、『がちゃがちゃどんどん』など音やリズムの楽しさを伝える言葉遊びの絵本などから選びます。『おつきさまこんばんは』など、短くてストーリー性のある絵本からも選びます。また、その時の年齢構成が高ければ、『おおきなかぶ』や『三びきのやぎのがらがらどん』などを読むこともあります。

「わらべうたの会」を担当してみて

あるお母さんからは、「わらべうたの会」でよく読む絵本の『もこもここ』が子どものお気に入りです。自分でも声を出して読むうちに、以前よりよく声を発するようになったというお話を伺いました。



このように幼い子どもたち

が、わらべうたや絵本とともに成長していく様子を直接知ることは、私たち職員が、本と子どもをつなぐ役割を果たす上での大事な土台となっています。親子でわらべうたを楽しんだ経験から、子どもが本や図書館が好きになってくれたら、子どもと本を結ぶ仕事に携わる者としてとてもうれしく思います。

(おおもり なおみ 児童サービス課)

ホームページ：ちいさな子どものためのわらべうたと絵本の会

<http://www.kodomo.go.jp/use/room/childroom/song.html>

平成25年度児童サービスワークショップ

国立国会図書館国際子ども図書館において、平成26年3月4日に標記ワークショップを開催したので報告する。

1. はじめに

現在、公共図書館では、本と子どもを結び付けるイベントとして広くおはなし会が行われている。平成24年度に開催した「図書館員のためのおはなし会」では、各館で行うおはなし会について現状や課題を共有することができ、好評だった。それを受けて、平成25年度は時間を拡大し、ワークショップ形式で開催した。テーマは「図書館でのおはなし会」とし、講師を公共図書館での実務経験があり、おはなし会も担当されていた汐崎順子氏（慶応義塾大学非常勤講師）に依頼した。



汐崎講師

また、交流を深めるため、人数を25人、対象も公共図書館の児童サービス担当者限定した。

2. 内容

参加者には事前にアンケートを行い、各館のおはなし会の現況と汐崎氏への質問等を把握した。プログラムや記録用紙も事前に提出してもらい、ワークショップ運営の参考にした。

ワークショップでは、講義、国際子ども図書館おはなし会 DVD 視聴、意見交換等を行った。概要は以下のとおりである。

(1) 講義「図書館での“おはなし会”について考える」

まず、汐崎氏は、おはなし会は、子どもに出会う・子どもの本を知る・子どもと本を結び付けるといった役割を持つ大切なものであると指摘した上で、おはなし会

を取り巻く状況について次のように述べた。

① ボランティアとの協働

おはなし会でのボランティアとの協働が必須の要件になっている館も多い。図書館・図書館員がサービスの目的、意義を理解した上で、イニシアティブを取らなければならぬが、経験豊富なボランティアに職員が意見を言うことができないという事態も起きている。あくまでもボランティアには「図書館の目的を達成するためのお手伝い」をしてもらうことを、館の姿勢として明らかにすること、図書館員がボランティアに対して「図書館の目的、児童サービスの目的は何か」をきちんと説明できることが必要である。図書館員は、仕事として子どもと本をつなぐことに取り組むことを自分の信念としてほしい。

② 本が主役

イベント性が先行してしまうと、おはなし会の内容が問われなくなる恐れがある。本を忘れていないか、イベント性のみ先行させて子どもを集めようとしていないかを常に検証すべきである。

「長く読み継がれてきた本」や、「良い本だが体裁が地味なために子どもたちの手に取られにくい本」を子どもたちに手渡すことは、大切な図書館員の仕事である。子どもと本とを結ぶに際しては、その本が提供するに値する本であることが前提であり、そのことは図書館の選書や蔵書構成の質の問題へとつながっている。

もし、図書館員が日常的におはなし会の実施に関われなくても、ボランティアが「図書館の活動」としておはなし会を行っているならば、図書館員は「どんな本を

選び、どのように子どもたちに伝えているのか」をしっかりと知っていかなくてはならない。ボランティアがどんな本を読んでいるかをチェックしないのは、責任放棄とも言える。

③ おはなし会で“子どもを知る、子どもの本を知る。”

おはなし会は参加人数などで評価されてしまう部分もあるが、数だけ



ワークショップの様子

を見て個々の子どもたちを見ないようにするのはいけない。おはなし会には、ギブだけでなくテイクもあり、図書館員が子どもたちから学ぶ良い機会である。一人一人の子どもの姿をきちんと捉え、今の子どもたちが何をどう受け止めるのかを知るため、そして子どもの本を知るための多くの材料を提供してくれる大切な場である。また、図書館員自身も、同僚から絵本の読み聞かせを聞くなどして、楽しさを実感することは大切だ。

④ まとめ

子ども時代に良い本を読んだ学生は、良い読書体験を語ってくれる。おはなし会は、子どもに対して良い読書体験を提供する機会だということを忘れないでほしい。

(2) 国際子ども図書館おはなし会 DVD 視聴

当館でのおはなし会の様子を DVD で視聴した。視聴後に職員が当館のおはなし会の流れを説明した。プログラムについて汐崎氏から、外国の創作読み物、日本の昔話の絵本の順に語り、子どもたちが集中して疲れたところで、一緒に声を出して参加できるような絵本を選んでいるなど、よく考えられているとの評価があった。

視聴したおはなし会のプログラム

1. 手遊び・わらべうた「ひとつとひとつで」
2. ストーリーテリング「あなのはなし」
『おはなしのろうそく』4巻 東京子ども図書館
3. 絵本の読み聞かせ(1)
『だいくとおにろく』福音館書店
4. 絵本の読み聞かせ(2)
『もけらもけら』福音館書店
5. 手遊び・わらべうた「さよならあんころもち」

(3) 意見交換会

汐崎氏が事前アンケートから、ボランティアとの協働についての事例等を取り上げ、コメントした（詳細は国際子ども図書館ホームページ*参照）。

3. 児童サービスワークショップの意義と成果

講義終了後のアンケートでは、「おはなし会の意義と目的を、図書館の役割・使命の中で捉えることができた。」「漠然と行ってきたおはなし会を見直す機会となった。」との感想が寄せられた。また、意見交換会では、全く経験や知識がないまま、児童サービス現場に配属された悩みや、短い期間での異動や業務の繁忙、指定管理者制度の導入等に伴い、おはなし会に限らず、児童サービスの専門的知識の継承と経験の蓄積が難しい状況があるという意見が呈された。事後のアンケートでは、他館の状況など情報共有ができて有意義だったとの回答が多く寄せられ、実務研修の希望や選書などをテーマとしたワークショップの要望もあった。

当館は今後も、ホームページなどを通じて、当館が蓄積したおはなし会に関するノウハウを全国に発信したり、ワークショップ等を継続して行ったりすることで、児童サービス関係者に役立つ情報や交流の場を提供し、児童サービス現場からの期待に応えていきたい。

*平成25年度児童サービスワークショップの記録は国際子ども図書館ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/event/backnumber.html> に掲載しています。

(児童サービス課)

「絵本で知る世界の国々—IFLA からおくりもの」展

飛田 由美

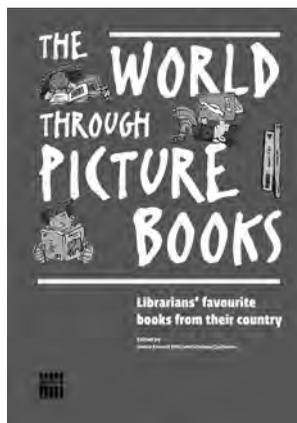
IFLA 絵本で世界を知ろうプロジェクト

国際図書館連盟（IFLA）とは、1927年に創設された図書館及び情報サービスに関する世界最大の組織である。その分科会の一つである児童・ヤングアダルト図書館分科会（以下、児童 YA 分科会）では、2010年から「絵本で世界を知ろうプロジェクト」に取り組んできた。プロジェクトの目的は、子どもたちが絵本を通じて外国の文化・言語に親しむことができるように、世界各国の図書館員がそれぞれの国の代表的な絵本を10冊ずつ選んで展示会セットを構築し、それを用いて世界中で展示会を開催することである。展示会セットは2組構築され、1組は提案国であることと、震災復興に資するために日本の国際子ども図書館に、もう1組はフランス国立図書館に寄贈された。

絵本は次のような基準で選ばれた。

- ✓ 対象年齢は0～11歳
- ✓ その国の代表的な絵本で長く読み継がれている、あるいは読み継がれると思われるもの
- ✓ その国で出版された、その国のオリジナル作品
- ✓ 読み聞かせ、子どもと一緒に読むのに適した作品

児童 YA 分科会が作成した展示会のカタログには作品の解説とともに各国の選定方法についても記載がある。候補作品をウェブで公開して図書館員の投票で選定した国やその国の図書館協会が選定した国、IFLA の常任委員やその国の IBBY（国際児童



展示会ポスター

¹ <http://www.ifla.org/node/6718>

図書評議会)の支部が選定した国など、選定方法は様々である。日本の10冊は日本図書館協会児童青少年委員会が選定した。

このプロジェクトにより、2013年5月までに33の国・地域の絵本259冊が集まった。選ばれた絵本を見ると、国によって特徴があって興味深い。例えばアメリカや日本などは、刊行年が古く、世代を超えて読み継がれてきた絵本を中心に選定しているのに対し、アフリカの国々は比較的新しいものを選定している。韓国からは繊細で静かな印象の絵本が多く選ばれているが、フィンランドからはポップな絵柄の絵本が多く選ばれている。また装丁も北米やヨーロッパ、東アジアの絵本はハードカバーが多いが、アフリカの絵本はソフトカバーの薄い本が多いといった違いがある。

今回選定された絵本のうち、最も刊行年が古い本は、スウェーデンの『ちいさなちいさなおばあちゃん』で、初版は1897年である。アメリカからは、1928年初版の『100まんびきのねこ』が選ばれている。これらは年月を経ても色あせない作品の代表と言えるだろう。

展示会の開催

当館で、2013年5月9日から6月9日まで、展示会を開催した。展示会では、IFLAから寄贈された絵本を展示するとともに、この展示会を訪れた子どもたちが国際理解を深めることができるように、各国の地図や人口等の国の概要、その国の「こんにちは」を意味する言葉等をパネルで紹介し、国旗も併せて展示した。また、いろいろな言語で書かれた絵本の内容が分かるように、児童 YA 分科会が作成した展



3階ホールでの展示会の様子

示会カタログの作品の解説部分を翻訳して、キャプションとして絵本とともに展示した。

プロジェクトの参加国の33の国・地域のうち、10か国がアフリカの国・地域である。アフリカから多くの国が参加しているので、日本ではあまり見ることのないアフリカの絵本65冊を今回の展示会

では紹介することができた。

展示会開催期間中に4,743人が来場し、アンケートの結果、満足度は92%と好評だった。アンケートの自由記入欄には、「各国の子どもについての視線の共通しているところ、異なる表現が見られて面白かった。」「国の地図・あいさつの言葉などが書かれたボードとともに国旗が立っていて、そこに抄訳付きの本があるのは分かりやすく、手に取りやすかった。」といった感想が寄せられた。

成長する展示会

児童 YA 分科会は、現在も各国の委員を通じてこのプロジェクトへの参加を呼び掛けており、参加する国は徐々に増加している。また、既に参加している国の絵本が追加で送られてくることもある。5月の展示会開催時には259冊だった絵本が、年度末には300冊近くとなり、更に増える見込みである。今後の成長が楽しみである。

展示会セットの貸出し

展示会終了後、展示会セットの貸出しを開始した。当館に寄贈されたセットは、日本国内とアジア・オセアニア地域に、フランスに寄贈されたセットは、アジア・オセアニア以外の世界各国に貸し出すことになっている。2013年度、海外へは、韓国の国立子ども青少年図書館と仁川市立スホン図書館、国内へは、鎌倉市中央図書館へ貸し出した。



展示会セット貸出しの資料と貸出箱

展示会及び展示会セットの貸出しは今後行う予定である²。

(とびた ゆみ 前・児童サービス課長)

² <http://www.kodomo.go.jp/event/lend/index.html>

三つのケース展示に見る21世紀の日本の絵本

広松 由希子

はじめに

2014年2月、宮川健郎氏監修の「日本の子どもの文学」展の一角に、三つのガラスケースによる「21世紀の子どもの本」という新しい展示コーナーが作られた。その第1回として「絵本」の展示を担当させていただいた。

日本では、「絵本の黄金期」といわれる1960年代から1970年代の絵本が、今もベストセラーの中心で、その後の新しい絵本はあまり知らない人が多い。世代を越えて読み継がれてきた古典絵本には、確かな魅力があるが、絵本は時代の空気、社会を反映する文化でもある。今の子どもたちに向けて作られた絵本に、橋渡しをする大人たちがもっと目を向けてほしい。

本展では、社会が大きく揺れ動いた2001年から2013年に出版された絵本から、三つのトピックを取り上げて紹介した。ささやかな空間ではあるが、新しい表現と傾向に注目していただくきっかけになればと考えた。

赤ちゃん絵本の広がり——さまざまな試み

日本で最も多く読まれている絵本『いないいないばあ』¹（童心社 1967）をはじめ、赤ちゃんが楽しめる絵本は1960年代からあったが、ごく少数だった。少子化、核家族化が進むなか、親子のコミュニケーションを深める手段として、乳児への読み聞かせが重視されるようになってきた。

2001年、自治体から全ての赤ちゃんへ絵本を手渡す事業「ブックスタート」が始まり、以後、多くの出版社が赤ちゃん絵本に取り組むようになる。現在では、毎年200タイトル以上の赤ちゃん絵本の新刊が出版されるようになった²。写真から抽象、図鑑的なものからナンセンス絵本まで、内容もバラエティに富んでいる。展示では、

¹ 累計発行部数528万部。トーハン編『ミリオンぶっく 2013年度版』

² NPO ブックスタート調べ。2014年5月末のデータでは、1741市区町村のうち、882の自治体で実施しており、全国の半数以上に広がった。

その表現の広がりを伝えられるように選書した。

ブックスタート開始に先立ち、1995年に「こどものとも0.1.2.」（福音館書店）が創刊された。10か月から2歳までの赤ちゃんの感覚にどのような表現が訴えるのか、月刊絵本という出版形態を生かし、ベテランから若手の作家まで、未開の分野に意欲的に取り組み、赤ちゃん絵本の可能性を広げた。

2003年に始まったシリーズ「谷川俊太郎の赤ちゃんから絵本」（クレヨンハウス）は、対象を「赤ちゃんから」と謳っていることに注目したい。大人が赤ちゃんと同時に、感情を共有しつつ、時に違う視点で楽しむ絵本もある。現代美術家や漫画家とのコラボレーションで冒険的な発信を続けている。

国境を越えた絵本づくり——逆輸入絵本と共同出版

2000年代初頭、小さな絵本ブームがあった。絵本作家を志望し、海外での出版の可能性を探る日本人も増えた。

イタリアのボローニャ・ブックフェア（Bologna Children's Book Fair）は、日本でも絵本原画展として早くから知られていたが、2000年代には、絵本作家の登竜門のコンクールとして、また世界中の出版社が集まる子どもの本の見本市として周知され、新人作家が海外へ出ていくための舞台となった。海外でデビューした後には日本に紹介される「逆輸入絵本」の現象も広がった。

展示では、ボローニャを足場に編集者に見出され、後に日本で人気を博した作家として、三浦太郎、いまいあやの、たしろちさと、よねづゆうすけの絵本を紹介している。彼らの作品からは、国境を越えた“International Illustrator Style”³（国際的画風）を感じることができる。

海外とのやり取りもメールで時差なく進行でき、画像もデジタルデータによる出版が主流になった。国境を越えた共同出版も盛んになった。

意義深い共同出版として、童心社の「日・中・韓 平和絵本」シリーズの絵本を展示した。3国の出版社（童心社、訳林出版社、四季節出版社）と12人の絵本作家が協力し、平和をテーマにした絵本を各国語で同時出版するプロジェクトだ。2005

³ Zuzana Jarošová, “BIB 2013-Our Identity Today,” 24. *Bienále ilustrácií Bratislava, BIBIANA*, 2013.7

年に日本の作家たちが呼び掛け、3国で議論を重ねてきたという。2011年に第一期の3冊が出版され、2012-13年には日本の作家による3冊が出版されている。

また、独自の形態の共同出版として、駒形克己の『Little Tree』を展示した。駒形は、**One Stroke** という自身の小出版社をもち、紙質など細部にまでこだわった、大量生産では表現し得ない絵本制作を続けている。電子化の時流に逆らうような抑制した表現で五感に訴える絵本は、日本以上に海外での評価が高く、彼の理念に共感するフランスやメキシコの小出版社と共同で絵本を出している。

3.11以降の絵本——新しい希望のかたち

戦後の復興期から、時代とともに緩やかに変化してきた日本の絵本表現だが、2011年3月11日に起きた東日本大震災と原子力災害は、絵本の作り手たちを大きく揺り動かした。この災害をどのように子どもに伝え、被災した子どもたちにどう寄り添っていけるのか。絵本は、どんな希望を語っていけるのか。作家たちは、それぞれの方法を模索しながら自己の表現と向き合うことになる。

2011年秋頃から、新しい創作絵本の動きが出てきた。展示では、2011年秋から2013年までの出版物から、直接的、間接的に、震災後のメッセージを受け取ることができるものを広く選んでみた。

災害の様子をリアルに伝えるドキュメント的な絵本（『つなみ、てんでんこはしれ、上へ』ポプラ社、2013）もあれば、だじゃれやユーモアをまじえて被災した子どもたちを勇気づけようとするもの（『ラーメンちゃん』絵本館、2011）、深い喪失感に寄り添うもの（『ここにいる』ポプラ社、2011）、日常のかけがえなさに光をあてるもの（『あさになったのでまどをあけますよ』偕成社、2011）、自然を通して人間の生き方を問い直すもの（『おじいさんとヤマガラ』小学館、2013）、現代社会の在り方に警鐘を鳴らすもの（『さがしています』童心社、2012）、不安や迷いを共有するもの（『およぐひと』解放出版社、2013）もある。

このケースには収められなかったが、震災から3年が過ぎ、今までにはなかった「3.11以降の絵本」も出版されている。新しい希望を伝えるための表現が生まれてくる、私たちは分岐に立っている。

（ひろまつ ゆきこ 絵本評論家、絵本作家）

第79回国際図書館連盟（IFLA）年次大会参加報告

飛田 由美

IFLA とは、1927年に創設された図書館及び情報サービスに関する世界最大の組織である。テーマ別に40以上の分科会があり、世界の図書館に関する様々な課題に取り組んでいる。IFLA 児童・ヤングアダルト図書館分科会（以下、「児童 YA 分科会」）は、児童サービスと YA サービスに関する各国図書館の取組や課題などを取り上げ、セッション等を通じて、情報交換や交流を行っている。「第79回国際図書館連盟（IFLA）年次大会」（以下、「年次大会」）は、2013年8月17日から23日まで、シンガポールで開催された。筆者は、主に児童 YA 分科会主催のセッション等に参加した。その内容を紹介する。

サテライトミーティング

児童 YA 分科会のサテライトミーティングは資料保存コア活動（IFLA/PAC）と共催で、年次大会に先立つ8月14日、15日にタイのバンコクで開催された。テーマは「未来を創る：児童・ヤングアダルトに関する、全ての形態の文化遺産の保存、デジタル化、アクセス」であった。

15か国から約120名が参加し、「保存とデジタル化」、「公共図書館、学校図書館の文化遺産」、「口承文化遺産」等の発表があった。日本からは、神奈川子どもプラザの石川道子氏が「A World Rich in Words within Japanese Nursery Rhymes」と題する発表を行い、日本のわらべうたを解説しながら実演した。日本のわらべうたは非常に好評で、石川氏の発表の後、各国の参加者が自国のわらべうたを次々と紹介する場面もあった。



サテライトミーティング

IFLA 年次大会

今回の大会のテーマは「未来の図書館、無限の可能性」で、世界の約120の国と地域から約3,750名が参加した。日本からの参加者は約50名だった。児童 YA 分科会では、「研修と教育」をテーマにしたセッションや分科会のプロジェクトをテーマにしたセッションを行ったほか、「YA サービス」をテーマにしたオフサイトセッションがジュロング公共図書館で行われた。

オフサイトセッションでは、ロシア国立図書館の YA サービス等、五つの発表があった。

ロシア国立図書館では、将来の利用者獲得のためにも YA サービスに力を入れているということだった。発表後は、ジュロング図書館を見学した。同館は4階建てのきれいな建物で、最上階は全て YA 向けの資料室になっており、参加者は4階を中心に見学した。

YA の資料室は、かわいらしいキャラクターで飾られ、書架には YA 向けの文学やノンフィクションのほか、日本の漫画の翻訳もたくさん並んでいた。資料室にはステージもあり、イベント等で使用されている。シンガポールは受験が大変厳しいらしく、資料室を利用している中高生たちは、本を読むより勉強している子が多かった。

22日に閉会式が行われ、IFLA 会長の Ingrid Parent 氏の任期が終了し、新しい会長にフィンランド図書館協会の Sinikka Sipila 氏が就任した。また、Best IFLA Poster 2013 の発表があり、福島県立図書館の鈴木史穂氏による「The Librarians of Fukushima」が受賞した。このポスターは、東日本大震災以後に福島県内の図書館員が行ってきた支援の取組を図書館員の似顔絵とともに紹介したものである。



ジュロング公共図書館

(とびた ゆみ 前・児童サービス課長)

韓国国立子ども青少年図書館との業務交流に参加して

橋詰 秋子

2013年5月30日から31日にかけて、韓国で行われた韓国国立子ども青少年図書館及び関連機関との業務交流に参加した。国際子ども図書館と韓国国立子ども青少年図書館との業務交流は2009年度から開始されたもので、今回は、2年ぶり3回目の開催である。本稿では、韓国国立子ども青少年図書館の子ども・青少年サービスの様子を中心に紹介する。



韓国国立子ども青少年図書館の入口

初日に行われたセミナーでは、子ども・青少年向けの館内サービスをテーマとして、当館からは「国際子ども図書館の子ども向け館内サービスの現況と今後の展開」について、韓国側からは「国立子ども青少年図書館における利用者サービスの現況と課題」について報告し、それぞれに関して活発な質疑応答がなされた。

多様な読書プログラム

韓国側の報告の中で特に興味深かったのは、韓国国立子ども青少年図書館が積極的に行っている多種多様な読書プログラムである。当館の「子どものためのおはなし会」に相当する「童話の口演」、子どもたちが演劇遊びを通じて童話の内容に親しむ「演劇で読む童話」、各国駐韓大使館と協力して子どもたちに世界の国の歴史と文化を紹介する「外国文化旅行」、また青少年向けには「青少年人文学のお話」（大学教員や作家による講演会）や「青少年人文学遠足」（文芸作品の舞台を探訪し著者と対話する館外活動）といった様々な内容のプログラムを実施していた。プログラムの中には、「英語 Story Time」や「お姉さんお兄さんと一緒に読む英語の絵本」のような英語習得を意図したプログラムもあり、韓国社会における英語学習需

要の高さも感じられた。また、ICT を活用した「仮想現実 童話口演体験館」というプログラムは、大型スクリーンに映し出される童話の光景に子ども自身の映像がリアルタイムに投影されることで、子どもたちが童話の世界の主人公になれるという内容であった。

こうした読書プログラムが、2012年から特に力を入れて行われるようになったお陰で、ここ数年減少気味であった韓国国立子ども青少年図書館の利用者数は再び増加に転じたということである。

子ども・青少年向け閲覧室

韓国国立子ども青少年図書館には「子ども資料室」、「外国児童資料室」「青少年資料室」、「マルチメディア室」、「研究資料室」等があり、子どもから研究目的の大人まで幅広く利用されている。

「子ども資料室」には、幼児から小学校低学年までの児童書約20,000冊が開架されている。この部屋は、床がオンドル（韓国式の床暖房）になっていたり、読書通帳システムが設置されていたり、子どもたちが楽しんで本を手にとれるように工夫されていた。読書通帳システムとは、自分の読書履歴を銀行通帳のような手帳に記帳（記録）でき



子ども資料室内部の様子



読書通帳システム 端末（左）と通帳（右）

るもので、子どもたちにとっても人気があるとのことであった。

中学生・高校生向けの閲覧室である「青少年資料室」には、最近3年間に国内で刊行され、納本された青少年向け図書、青少年の役に立つ一般図書、外国刊行図書、合わせて約1万9,000冊が開架されている。同室では、2012年からインターネット上に「ブッカーブッカーブログ」¹を開設し、青少年向けプログラムの案内や開催後記、有名人の読書コラムや司書による推薦図書といった情報提供を行っている。ブログの作成や青少年向けプログラム等の企画には、「青少年ブログ記者団」に登録した中高生に参加してもらっているとのことであった。



青少年資料室の様子

終わりに

今回の交流を通じて、韓国国立子ども青少年図書館は、国内唯一の国立の子ども図書館として全国の図書館を支援する立場にあること、少子化やIT化が進む社会の中で子ども・青少年向けサービスの在り方を探っていることなど、当館との共通点が多いと感じた。2014年度は、韓国側が来日して交流する予定である。今後も韓国国立子ども青少年図書館との交流を深めていきたい。

(はしづめ あきこ 前・児童サービス課)

¹ <http://blog.naver.com/bbooker> (accessed 2014-04-29)

講演会「トルコにおける児童書の執筆と出版」

2013年はトルコ共和国建国90年、2014年は日本とトルコの国交樹立90年に当たる。国際子ども図書館は、トルコの編集者で児童文学作家、児童文学研究者でもあるメリケ・ギュンユズ氏（セディル出版グループ編集局長）を招へいし、2013年12月7日に講演会「トルコにおける児童書の執筆と出版」を開催した。

ギュンユズ氏はトルコ古典文学を専攻したのち、児童書の出版社であるエルデム出版に勤め、長年編集に携わる一方で、児童文学の研究及び執筆を行ってきた。現在は、エルデム出版を統括するセディル出版グループで編集局長を務めている。講演の通訳は、日本トルコ文化交流会のオメール・アユディレック氏が務めた。



メリケ・ギュンユズ氏

トルコの子どもの読書事情

講演の前半では、1860年から現代までのトルコの児童文学の歴史、現在の児童書の出版事情、近年盛んに行われている子どもの読書推進活動の状況、子どもたちに人気のある児童書などが紹介された。

トルコでは近年、大統領府が子どもの読書推進を重視しているため、図書館への予算配分が年々増加している。人口に対して書店の数が少ない上に、本を買って読むことができるのは一定の生活水準以上の家庭の子どもに限られるため、多数の子どもが本と出会う場所は主に学校である。よって、特に学校図書館の充実に力を入れている。文部科学省の下に読書推進本部を設置して各種の取組を進めており、学校図書館は学校の最も良い場所に作り、面積は校長室より広くしなければならないなど、厳しい規定を設け、デザインもいろいろ工夫しているとのことだった。また、文化観光省も公共図書館の活性化の取組を進めており、既存の児童図書館が内装の変更や家具の入替えなどで魅力的に変身した例が写真で紹介された。これらの図書

館ではストーリーテリングのほか、作家による読み聞かせとサイン会、演劇、親子で参加するワークショップなど、様々な子どものための催しが開かれているとのことである。

トルコの児童書紹介

講演の後半には、講師の著作も含め、トルコで今子どもたちに読まれている児童書が多数紹介された。トルコでは近年児童書の出版が盛んになっているが、日本の児童書のトルコ語への翻訳、トルコの児童書の日本語への翻訳はごく少ないた



講演で紹介されたトルコの児童書（一部）

め、今後互いに翻訳して紹介することに大きな希望と可能性を感じているとのことだった。

来場者との質疑応答も活発に行われた。

会場には、当館が所蔵するトルコ語の児童書及び講師がトルコから持参した児童書を展示し、来場者が自由に手に取れるようにした。

参加者アンケートでは「なかなか知ることができないトルコの出版状況について、政治や社会情勢も含めて具体的に知ることができて良かった。」「児童文学の翻訳事情や教育の話が興味深かった。」「トルコにおける読書推進活動、特に国が子どもの読書環境を整えるプロジェクトの話が興味深かった。」といった感想が寄せられた。

職員との交流

講演会前日の12月6日には、ギュンユズ氏と当館職員との懇談会を行った。ギュンユズ氏は、トルコの児童書に関する問題点の一つとして、児童文学を文学として研究する大学・教育研究機関や、国立の児童書専門図書館がないことを挙げ、



職員との懇談会

今回の日本滞在から解決への新たなヒントを多く得ることができたと話した。日本とトルコの児童書や子どもの読書に関する状況を相互に知る貴重な機会となった。

トルコの児童書の寄贈

なお、今回の招へいに先立つ4月23日、トルコ大使館文化部ユヌス・エムレトルコ文化センターからトルコの児童書約300冊の寄贈を受けた。また、同センターにはギュンユズ氏紹介の労も取っていただいた。この場を借りて御礼申し上げる。

(企画協力課)

外国からの主な来訪者

(駐日外国機関からの来訪者を含む。)

平成25年4月から平成26年3月までに、外国(駐日外国機関を含む)から国際子ども図書館を訪れた方々の一部を御紹介します。

年月日	来訪者名(敬称略)
平成25年 4月23日	テラット・アイディン(トルコ大使館文化部ユヌス・エムレ トルコ文化センター東京代表)
	アイシェギュル・アトマジヤ(トルコ大使館参事官)
5月21日	イヴォナ・フミエレフスカ(絵本作家)
	イ・ジウォン(翻訳家、児童文学研究者)
5月29日	ミザナル・ラーマン(バングラデシュ文化省公共図書館部門長)一行2名
6月12日	アントネッラ・アンニョリ(図書館計画アドバイザー・元スピネア図書館(ヴェネチア)、サン・ジョバンニ図書館(ペーザロ)館長)
9月4日	ダン・ジョージソン(クイーンズランド州立図書館リテラシー及び青少年サービス部門長)
10月23日	陳力(中国国家図書館副館長)一行5名
12月6日	メリケ・ギュンユズ(セディル出版グループ編集局長、児童文学作家、児童文学研究者)
12月7日	シェレフ・アテシ(ユヌス・エムレ インスティトゥート副理事長)
平成26年 1月10日	ラス・ラマチャンドラン(元シンガポール国立図書館長)
2月13日	ミリアム・マルチネス(元出版社 FONDO 児童書部門編集長)

(企画協力課)

シンハラ語の絵本：スリランカと日本の架け橋

藤代 亜紀

国際子ども図書館では2013年度、シンハラ語で書かれた児童書（全72件）について書誌作成を行った。これによって、その全てを国立国会図書館のオンライン目録（NDL-OPAC）で検索可能となった。

シンハラ語は、スリランカの人口の約7割が使用している言語である。その文字を初めて見た人からは「かえるですか?」、「おしりみたい!」といった感想が飛び出るほど、独特の愛嬌がある丸みを帯びた形をしている。シンハラ語の絵本の中では、そんな文字の世界がめくるめく展開されており、日本の子どもたちはもちろんのこと、大人でも、一度見たらきっと驚くことと思う。

そもそもスリランカはどこにある国なのか、と思う読者もおられることだろう。スリランカはインドの南にぼつんと浮かぶ、北海道をやや小さくしたくらいの面積の島国である。2009年に内戦が終了したことに加えて、天然資源が豊かなことや勤勉な国民性などから、観光や産業、投資などの面でその将来性を期待されている。さらには第二次世界大戦後、仏教の慈悲の教えに従って日本への戦争賠償請求権を放棄して以来、日本とは良好な関係を築いており、親日的な人が多い。

そんなスリランカと日本をつなぐ架け橋となるようなシンハラ語の絵本について、当館所蔵資料の中から紹介したい。

シビル・ウェッタシンハ作品

日本語に訳されているシンハラ語の児童書といえば、スリランカの代表的な絵本作家シビル・ウェッタシンハ(සිවිල් වෙත්තසිංහ)の作品を挙げるができる。当館では、『きつねのホイティ』(හනසිටි නම් හිටලා) <請求記号 Y17-AZ6671>、

『ねこのくにのおきゃくさま』（බලේ රටට ආ පුද්ගල අමුත්තෝ）＜請求記号 Y17-AZ3533＞、『かさどろぼう』（කඩ හොරා）＜請求記号 Y17-AZ6694＞といった、日本語に翻訳されている作品のシンハラ語原書を所蔵している。日本語版については、当館を含め国内各地の図書館で開かれるおはなし会などでおなじみの絵本ばかりである。

実は、『きつねのホイティ』の原書は、筆者が2011年に初めてスリランカを旅行した際に、現地のキャラニヤ大学大学院に在学中でシンハラ語の児童書に詳しい伊藤佳子氏から御寄贈いただいたものである。伊藤氏によると、原書では主人公のきつねが、村の住民の家を訪問して食事にありつく前はニワトリを盗んでいたことや、そんなきつねを追い払う際に村人が「ホー！ヒトウ！ヒトウ！」と言っていたために、ホイティという名前がついたことなどが書かれているとのことで、日本語版では書かれていない描写について知ることができた。また現地滞在中は、この『きつねのホイティ』に出てくる、ココナツミルクで煮た野菜のカレーや、はちみつのたっぷりかかったヨーグルトといった、スリランカの食文化に実際に触れたことによって、同書の世界を深く味わうきっかけをつかむことができ、有意義な旅行となった。

日本発のシンハラ語絵本

逆に、当館では日本人が作った絵本をシンハラ語に訳した作品も所蔵している。

『わたし』（මම）＜請求記号 Y18-AZ6690＞という本の表紙を見ると、著者名である「谷川俊太郎」は「ඉන්තරේ තනිකමා」（読み方：シュンタロー タニカワー）、画家名である「長新太」も「ලක්ශ් චෝ」（読み方：シンター チョー）という表記に様変わりしている。このように人の名前が、日本語で書いた場合以上に長く伸びる発音になっているのを見ると、読者の皆さんもなんとなくのんびりとした気持ちになってくるのではないだろうか。こんなところからも、スリランカの穏やかでのどかな風土が垣間見えるように思う。

このほか、『あさえとちいさいもとう』(අක්කයි නංගියි) (林明子 作) <請求記号 Y18-AZ6691>、『せんたくかあちゃん』(රෙදි සෝදන අම්මා) (さとうわきこ 作) <請求記号 Y18-AZ6692>、『みんなうんち』(බෙට් කකාම) (五味太郎 作) <請求記号 Y18-AZ6693>、『おおきなかぶ』(රාබු අලය ගැලවීමෝ) (内田莉沙子 訳、佐藤忠良 絵) <請求記号 Y18-AZ6694>といった作品も所蔵している。これらは、スリランカの教育を支援する会から御寄贈いただいたものであり、同会のスタッフであるプラサンスー・カルコッテゲー(ජරසංසා කලකෝට්ටෙගේ)氏が日本語の原書からシンハラ語へ翻訳した作品である。残念ながら同会は閉会したが、今後もこのような翻訳出版活動によって日本の絵本がスリランカに紹介されることを通して、両国の絆がより一層深まるようになれば、と願っている。

ことばの絵本

おまけとして紹介したいのが『グナセーナ絵のアルファベット』(ගුණසේන සිතුම හේඩිය) <請求記号 Y17-AZ6706>という絵本である。これは筆者がスリランカの魅力にすっかりとりつかれて2012年にかの国を再訪した際に入手したもので、数多くあるシンハラ文字のうちの36文字を頭文字にしてできる単語を、挿絵とともに紹介している。自然豊かなスリランカならではの様々な動物や果物、風景などに混じって、竹や蓮の花などといった、シンハラ語が分からない日本人でも親しみを持てるイラストが描かれており、スリランカの雰囲気をちょっぴり楽しめるような味わい深い1冊である。

以上、シンハラ文字で書かれた絵本を何点か紹介した。世界中では多種多様な文字の児童書が出版されているが、その中でも個性的で魅力あふれる形をしているシンハラ文字の絵本と出会い、スリランカという国を身近に感じる日本人が増えることを期待したい。

(ふじしろ あき 資料情報課)

平成25年4月から平成26年3月までの主な出来事

平成25年4月から平成26年3月まで、1年間の国際子ども図書館の主要な活動を日付順に配列した（詳細は、pp.60-75「活動報告」参照。）。

平成25年

- 4月21日 講演会「私が子ども時代に出会った本—落合恵子」
- 4月23日 電子展示会「ヴィクトリア朝の子どもの本：イングラムコレクションよ
り」公開
トルコ大使館文化部ユヌス・エムレ トルコ文化センターから資料の寄
贈式典
- 5月5日 子どものためのこどもの日おたのしみ会
- 5月9日 展示会「絵本で知る世界の国々—IFLA からのおくりもの」（～6月
9日）
- 6月19日 第11回国際子ども図書館連絡会議
- 7月13日 展示会「日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」
関連講演会「児童文学と教育をつなぐもの—教材「ごんぎつね」を軸
に考える—」
- 7月23日 夏休み読書キャンペーン2013（～9月8日）
- 7月27日 科学あそび2013（28日とも）
- 7月31日 中高生のための「国立国会図書館の仕事」紹介（8月7日とも）
- 8月1日 夏休み小学生向け図書館見学ツアー（8日、15日、22日とも）
- 8月7日 東京都台東区教育委員会主催職員研修「職場体験」からの受託研修生の
受入れ（～8日）
- 8月8日 皇后陛下、展示会「日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で
見る歩み」御鑑賞
- 8月18日 日中韓子ども童話交流事業
- 8月22日 展示会「世界をつなぐ子どもの本—2012年国際アンデルセン賞・IBBY
オーナーリスト受賞図書展」（～9月29日）
- 8月23日 「教員のための博物館の日」に参加（～24日）

- 9月3日 平成25年度図書館情報学実習生の受入れ（～12日）
- 9月25日 『国際子ども図書館の窓』第13号刊行
- 10月5日 展示会「日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」
関連講演会「那須正幹さんに聞く—ズッコケ三人組からのメッセージ—」
- 10月13日 子どものための音楽会
- 10月15日 『平成24年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録』刊行
- 10月29日 第15回図書館総合展に参加（～31日）
- 11月11日 平成25年度国際子ども図書館児童文学連続講座「英米児童文学をめぐる時代と環境」（～12日）
- 11月16日 講演会「シリーズ・いま、世界の子どもの本は？」第7回「いま、フランスの子どもの本は？」
- 12月7日 講演会「トルコにおける児童書の執筆と出版」
- 12月8日 子どものための冬のおたのしみ会

平成26年

- 1月28日 展示会「子どもを健やかに育てる本2013—厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財（出版物）」（～2月23日）
- 3月3日 平成25年度子ども読書連携フォーラム「中高生の読書推進を考える」
- 3月4日 平成25年度児童サービスワークショップ「図書館でのおはなし会」
- 3月12日 プランゲ文庫（児童書）を国立国会図書館デジタルコレクションに追加（館内提供）
- 3月23日 子どものための絵本と音楽の会『はろると まほうの く にへ』
- 3月28日 国際子ども図書館調査研究シリーズ第3号『学校図書館におけるコレクション形成：国際子ども図書館の中高生向け「調べものの部屋」開設に向けて』刊行

活動報告

(平成25年4月～平成26年3月)

1. 児童書専門図書館としての活動

1.1 資料・情報センターとしての機能

(1) 蔵書構築

国内刊行児童書を納本制度により収集したほか、未収の国内刊行児童書（巖谷小波原作・黒崎義介画『キノコノキノスケ』等）、外国刊行児童書（オランダ語版アンデルセン童話集等）、国内外の児童書関連資料、児童サービス用資料及び学校図書館セット貸出用資料の収集を行った。また、主要児童雑誌の欠号補充等に努めた。

外国刊行児童書については、欧米や中国、韓国等のほか、外部専門家の収集希望図書リストに基づき、平成25年度はウルドゥー語の児童書・関連書及び英米の児童書・英語圏の児童書関連資料を重点的に収集した。さらに、より充実した蔵書構築に資するため、モンゴルの児童書・関連書について津田紀子氏に収集希望図書リストの作成を依頼した。

また、ボローニャ国際児童図書展事務局からボローニャ国際児童図書賞（ボローニャ・ラガッツィ賞）応募作品154冊を寄贈されたほか、平成24年度に続いて国際図書館連盟（IFLA）から「絵本で世界を知ろうプロジェクト」により集められた絵本140冊を貸出用資料として寄贈された。

これまでマイクロフィルムで提供してきた国際子ども図書館所蔵ブランゲ文庫児童書コレクション約8,100点全てについて、「国立国会図書館デジタルコレクション」に画像を登録したことにより、東京本館、関西館でも閲覧可能になった。

破損・劣化した資料については、更なる劣化の抑制と保護のため、外注により保存容器100個を作製して収納した。また、さびによる紙の劣化を予防するため、ホチキスでとじた資料500冊を糸でとじ直した。

(2) 情報サービス

○国立国会図書館サーチにおける児童書総合目録の提供

国立国会図書館（国際子ども図書館を含む。）、大阪府立中央図書館国際児童文学

館、神奈川近代文学館、三康文化研究所附属三康図書館、日本近代文学館、東京都立多摩図書館、梅花女子大学図書館、白百合女子大学図書館及び白百合女子大学児童文化研究センターが所蔵する児童書・関連資料の所蔵情報を一元的に検索できる児童書総合目録を、国立国会図書館サーチを通じて提供している。児童書のみを対象とした検索のほか、都道府県立図書館や政令指定都市立図書館蔵書、各種デジタル資料、レファレンス情報などの同時検索が可能である。

本年度は、OPAC をリニューアルした大阪府立中央図書館国際児童文学館及び東京都立多摩図書館と、データ更新の再開に向けて調整を行った。

国立国会図書館サーチ (<http://iss.ndl.go.jp/>)

○国立国会図書館蔵書検索・申込システム (NDL-OPAC) への目録データの追加及び児童書専門付加情報の付与

中国語500件、ヘブライ語291件、朝鮮語62件、シンハラ語60件の新規受入児童書資料の目録データを追加し、また、平成19年以前に受け入れたヘブライ語・シンハラ語児童書資料の遡及入力を行った。

児童書専門付加情報として、日本図書館協会から提供された『選定図書目録』平成23年分の内容解説データ及び日本児童図書出版協会から提供された『児童図書総目録』平成24年分の内容解説データ、計3,340件を投入した。また、平成25年に受け入れた新規国内刊行児童書データ2,618件に件名を付与した。

国立国会図書館蔵書検索・申込システム (NDL-OPAC) (<https://ndlopac.ndl.go.jp/>)

○レファレンス協同データベースへの事例提供

各種図書館からのレファレンス事例等をレファレンス協同データベースに登録しており、平成26年3月末現在、356件の児童書に関するレファレンス事例を提供している。平成25年度から、学校図書館及び学校図書館関係団体もこの事業に参加できるようになった。

レファレンス協同データベース (<http://crd.ndl.go.jp/jp/public/>)

○外国語に翻訳刊行された日本の児童書情報

日本の児童書の海外における翻訳出版情報のデータベースである。国立国会図書館職員が調べものに有用であると判断した各種情報源を国立国会図書館ホームページで紹介するリサーチ・ナビ内で提供している。平成26年3月末現在の収録データは3,848件である。

リサーチ・ナビ (<http://rnavi.ndl.go.jp/childbook/honyaku.php>)

(3) 利用者サービス

○来館利用サービス

児童書・児童文学に関する調査研究のための第一資料室及び第二資料室には、合わせて約3万冊の参考図書・研究書等を排架するとともに、利用者用端末を16台配備しており、資料検索、書庫資料の閲覧申込み、複写申込書の作成のほか、デジタル画像などの電子情報の閲覧が可能である。平成25年度の両室の利用者数は合計12,353名である。

○遠隔サービス

国際子ども図書館所蔵資料に関する遠隔複写申込みや図書館間貸出しの申込み並びに児童書及び関連資料に関する問合せに回答するレファレンスサービスに応じている。回答事例の一部はレファレンス協同データベースで紹介している。平成25年度の遠隔複写申込みは1,154件、図書館間貸出数は237点、文書によるレファレンス回答は207件、電話によるレファレンス回答は1,155件である。

(4) 国会サービス及び行政・司法の各部門に対するサービス

○国会サービス

国立国会図書館調査及び立法考査局を窓口として、資料の閲覧・貸出し・複写・レファレンスなどを行っている。平成25年度は調査及び立法考査局経由での貸出しのため80点を出納し、レファレンス5件について回答した。

○行政・司法の各部門に対するサービス

国際子ども図書館では国立国会図書館東京本館・関西館と同様に、各府省庁及び最高裁判所に設置されている支部図書館27館に対して、資料の貸出しなどを行っている。平成25年度の相互貸出しは62点である。

1.2 調査研究支援

○「国際子ども図書館調査研究シリーズ」第3号の刊行

平成26年3月、調査研究報告書「国際子ども図書館調査研究シリーズ」第3号『学校図書館におけるコレクション形成：国際子ども図書館の中高校生向け「調べものの部屋」開設に向けて』を刊行し、関係機関、都道府県教育委員会等に配布するとともに、PDF版をホームページに掲載した。

1.3 子ども読書活動推進の支援

(1) 子どもの読書に関する情報発信の強化及びネットワークの構築

○子ども読書連携フォーラム

子どもの読書に関わる連携協力の促進を目指して、公共図書館職員・学校図書館職員・研究者・児童書出版社等の幅広い参加者を対象とした「子ども読書連携フォーラム」を平成26年3月3日に開催した。これは、平成24年度まで実施していた「児童サービス協力フォーラム」の後継として行ったものである。「中高生の読書推進を考える」をテーマに、堀川照代氏（青山学院女子短期大学教授）をコーディネーターとして、パネルディスカッションや参加者ディスカッションを行った。参加者は105名であった。また、会場横のラウンジで、全国の公共図書館及び学校図書館における活動事例を紹介するポスター9点を展示した。

○「子どもの本と図書館の動き」

ホームページの「子どもの本と図書館の動き」で、国内外の主な児童文学賞、子どもの読書と図書館に関するニュース等を紹介している。平成25年度は国内外合わせて110件の情報を掲載した。

○「東日本大震災と子どもの読書についての情報」

平成23年4月1日から「東日本大震災と子どもの読書についての情報」をホームページに掲載し、東日本大震災と子どもの読書に関する情報へのリンク、国や図書館関連団体の動き、被災した子どもたちを支援するための活動等を紹介している。平成25年度は20件の情報を掲載した。

(2) 人材育成支援

○児童文学連続講座「英米児童文学をめぐる時代と環境」

児童サービスに従事する図書館員等を対象として、子どもに本を渡す大人が知るべき作品の時代的・社会的背景をテーマに設定して、開催した。当日の配布資料を国際子ども図書館ホームページで公開した。

実施日：11月11日～12日

受講者数：45名

監修：川端有子（日本女子大学教授、国立国会図書館客員調査員）

内容・講師：

- はじめに 川端 有子
- イギリスの歴史物語の流れ 本間 裕子（青山学院大学非常勤講師）
- 児童文学が描くイギリスの風土と子ども
内藤 貴子（昭和女子大学他非常勤講師）
- 児童文学におけるセクシュアル・マイノリティ
水間 千恵（川口短期大学専任講師）
- 歴史とジェンダーをめぐる——バーネットの『小公子』、『小公女』、マロの『家なき子』、『家なき娘』の場合 川端 有子
- 資料紹介 西尾 初紀（国際子ども図書館資料情報課長）
- 講義のまとめ 川端 有子

○講師の派遣

平成25年度に、公共図書館、図書館関係団体等の依頼により、6件の研究会・研

修会等の講師として、延べ6名の職員を派遣した。

○東京都台東区教育委員会主催職員研修「職場体験」研修生の受入れ

[8月7日～8日：研修生1名]

区立中学校の教員1名を受け入れた。研修生は、「中高生のための『国立国会図書館の仕事』紹介」を見学するほか、カウンター業務、レファレンスサービス等を体験し、最後に職員との懇談を行った。

○平成25年度図書館情報学実習生の受入れ

[9月3日～12日：実習生2名]

公募により愛知淑徳大学と同志社大学の実習生を受け入れた。実習生は、カウンター業務、レファレンスサービス、子どものへやのディスプレイ作成、読み聞かせ等の実習を行った。

○児童サービスワークショップ

平成24年度「図書館員のためのおはなし会」を実施し、好評を得たことから、平成25年度は時間を拡大しワークショップ形式にして、平成26年3月4日に開催した。汐崎順子氏（慶応義塾大学非常勤講師）の講義「図書館でのおはなし会とは」、国際子ども図書館のおはなし会を記録したDVDの視聴及び意見交換を行った。ワークショップには、全国の公共図書館の児童サービス担当者24名が参加した。

(3) 学校図書館支援

○学校図書館セット貸出し

学校図書館への支援として、「国際理解」をテーマとする児童書等約50冊を箱詰めにしたセットを「学校図書館セット貸出し」として全国の学校図書館へ貸し出している。ホームページでは、17種類ある各セットの資料のリストや解題を掲載するとともに、セットを使って学校図書館活動や学習・読書活動を進めた事例を全国から集め、活用事例として紹介している。平成25年度は、延べ253校に計11,493冊の資料を貸し出した。そのうち、東日本大震災の被災地支援として、被災地域の学校

延べ64校に計2,346冊を往復送料無料で貸し出した。また、子どもたちがお勧めの本を紹介した手紙を同封し、次に利用する学校にセットと共に届ける読書郵便を延べ48校へ送付した。

○学校図書館との連携による学習支援プロジェクト

平成27年度開室予定の中高生向け「調べものの部屋」の設置準備、特にコレクション形成の参考にするために、学校図書館のコレクション形成の現状を明らかにし、コレクション形成の効果的な方法等を探ることを目的として「中高生向け調べものの部屋の準備調査プロジェクト」を実施した。平成24年度から25年度にかけて実施した本プロジェクトは、中村百合子氏（立教大学准教授）が主査を務め、安形輝氏（亜細亜大学准教授）、青山比呂乃氏（関西学院千里国際中等部・高等部司書教諭）、児童サービス課員を委員とした研究会で行った。平成26年3月末、プロジェクト成果を「国際子ども図書館調査研究シリーズ」第3号として刊行した。

2. 子どもと本のふれあいの場としての活動

2.1 子どもの成長段階に応じた館内サービス

「子どものへや」、「世界を知るへや」、「おはなしのへや」で、子どもと本をつなぐための様々な取組を行っている。

○子どものためのおはなし会

毎週土曜日・日曜日の午後2時（4歳～小学1年生向け）と午後3時（小学2年生以上向け）に「おはなしのへや」で実施している。職員がストーリーテリングと絵本の読み聞かせを中心に行い、参加者には本のタイトルなどを記したプログラムと「おはなし会カード」（スタンプカード）を配布している。平成25年度は計179回実施し、延べ1,170名が参加した。

○ちいさな子どものためのわらべうたと絵本の会

毎月、第2水曜日と第3土曜日の午前11時に6か月以上3歳以下の子どもと保護者を対象として実施している。職員が、その日の参加者の年齢に合わせ、絵本の読

み聞かせとわらべうたを組み合わせたプログラムで行っている。平成25年度は合計24回実施し、延べ304組629名が参加した。

○夏休み読書キャンペーン

7月23日から9月8日まで、子どもが様々な本に出会うための企画として、本を読んで問題に答えるクイズを「子どものへや」で実施した。子どもの年齢に応じて、初級編・中級編・上級編の3種類の問題を用意し、来室した子どもたちに解いてもらった。延べ1,092名の子どもが参加した。

○中高生のための「国立国会図書館の仕事」紹介

中学生、高校生を対象として標記イベントを開催した。職員が自分の担当する仕事を説明し、参加者からの質問に答えた。また、職場見学として、国際子ども図書館の資料室や書庫を案内した。7月31日に高校生向けプログラムを、8月7日に中学生向けプログラムを実施し、計44名が参加した。

○科学あそび2013

子どもの、科学と科学の本への興味を育てることを目的として、7月27日、28日にホールで小学生以上を対象に各1回実施した。原田佐和子氏(科学読み物研究会)を講師に迎え、「見えない音を確かめよう～音の実験」をテーマに行った。

実験終了後に、職員によるブックトークを30分行った。音から派生して耳や楽器の出してくる本を紹介し、関連する絵本の読み聞かせも行った。小学生を中心に計78名の参加があった。ホームページに活動紹介を掲載した。



○夏休み小学生向け図書館見学ツアー

8月1日、8日、15日、22日、小学生向けの図書館見学ツアーを行った。館内見学と質疑応答及び短縮版のおはなし会を全4回行い、計66名の参加者があった。

○子どものためのおたのしみ会

5月5日に、「こどもの日おたのしみ会」を2回実施し、60名が参加した。ストーリーテリング、パネルシアター「どうぶつしりとり」、大型絵本の読み聞かせなどを行った。12月8日には、上野動物園との協力イベントである「冬のおたのしみ会」を実施し、37名が参加した。今回、テーマの動物には「カバ」を選び、当館職員がカバを題材とした絵本の読み聞かせをした後、上野動物園の飼育員が頭骨や写真を見せながら動物の説明をした。また、国際子ども図書館でカバや動物園に関するブックリストを作成し、当日の参加者に配布するとともに、上野動物園内でも配布した。

○子どものための音楽会

東京都歴史文化財団東京文化会館との共催で、「Music Weeks in TOKYO 2013 まちなかコンサート～芸術の秋、音楽さんぽ～」の一環として10月13日に2回実施した。子どもに親しみのある曲を選んで、弦楽四重奏の演奏を行った。演奏終了後に職員が音楽に関する本のブックトークを行い、その中で絵本の読み聞かせも行った。計310名の参加を得た。

○子どものための絵本と音楽の会

東京・春・音楽祭実行委員会と共催で、平成26年3月23日に2回実施した。絵本『はるどまほうのくにへ』（クロケット・ジョンソン作 岸田衿子訳 文化出版局 1972）の朗読に合わせて、絵本のイメージで作曲・編曲された音楽をヴァイオリンとチェロの生演奏で楽しんだ。計204名の参加を得た。

○子どもの見学

幼稚園、保育園、小中学校、高等学校等、団体向けの見学を行っている。小学生向けには見学とおはなし会を体験するプログラム、中高生向けには職業インタビューを中心とするプログラムでそれぞれ行った。平成25年度は、68件1,103名の参加があった。

2.2 本や読書、図書館に関する情報の発信

ウェブ上の子どもと本のふれあいの場として平成22年に公開した「国立国会図書館キッズページ」では、「図書館員の一日」、「よんでみる？」のコンテンツを追加した。

国立国会図書館キッズページ (<http://www.kodomo.go.jp/kids/index.html>)

3. 子どもの本のミュージアムとしての活動

国際子ども図書館では、子どもの本の持つ魅力を伝えるとともに、子どもと本との出会いの場を提供することを目的として、子どもの本・文化に関する展示会を行っている。

3.1 館内展示

○日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み

[平成23年2月19日～開催中 3階本のミュージアム]

(4月1日～平成26年3月31日 計261日：入場者数69,369名)

国際子ども図書館所蔵資料から、明治から現代に至るまでの代表的な日本の児童文学作家・画家の作品並びに子どもが児童文学に接する一つの機会である教科書及び教科書掲載作品、また、童謡作品を紹介している。また、半年ごとにテーマを替える特別コーナーも設け、全体で約270点を展示している。平成25年度に取り上げたテーマ・内容は以下のとおりである。



児童文学作家

第5回 2月26日～8月18日 新美南吉

第6回 8月20日～平成26年2月23日 那須正幹

21世紀の子どもの本

その1 平成26年2月25日～開催中 絵本

関連催物と開催日、参加者数は次のとおりであった。

●ギャラリートーク

(5月25日・9月21日・平成26年1月11日 参加者計54名)

●講演会「児童文学と教育をつなぐもの—教材「ごんぎつね」を軸に考える—」

(7月13日 参加者93名)

●講演会「那須正幹さんに聞く—ズッコケ三人組からのメッセージ—」

(10月5日 参加者98名)

○世界をつなぐ子どもの本—2012年国際アンデルセン賞・IBBY オナーリスト受賞図書展

[8月22日～9月29日 計33日 入場者数6,510名 3階ホール]

国際児童図書評議会 (IBBY) の日本支部である日本国際児童図書評議会 (JBBY) との共催で、2012年の国際アンデルセン賞受賞者のこれまでの作品と、IBBY オナーリスト (優良作品) の推薦作品及びその邦訳書、合わせて約200冊を直接手に取って見ることができるよう展示した。

○子どもを健やかに育てる本2013—厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財 (出版物)

[平成26年1月28日～2月23日 計22日 入場者数2,257名 3階ホール]

厚生労働省雇用均等・児童家庭局との共催で、児童の福祉の向上、子どもたちの健やかな育ちに役立てることを目的として厚生労働省社会保障審議会が推薦した絵本や図書49タイトルを、手に取って自由に閲覧できる形で展示した。

○資料室での小展示



第一資料室では資料を用いて、当館で開催する展示会や講演会に連動した小展示を期間中に5回実施し、利用者の興味・関心を深める一助とした。

また、平成24年に日本の主要な児童文学賞を受賞した作品と、児童サービスの基本資料を通年で展示した。

第二資料室では当館所蔵の外国の児童書を中心に、「海外のシンデレラ絵本」など利用者が親しみやすいテーマを選び、小展示を5回実施した。

○子どものへやでの小展示

子どもが本を手に取りやすいよう、本の表紙を見せて書架上に置き、展示している。「子どものへや」での展示は、季節に関連する内容や子どもの興味を引くテーマにしている。「世界を知るへや」では主に開催中の展示会に関連させて展示し、資料の入替えをしながら何度訪れても楽しめるような工夫をしている。ホームページに掲載している小展示のリストは、過去のものをテーマ別に分類して見やすくした。



3.2 電子展示

○ヴィクトリア朝の子どもの本：イングラムコレクションより

国際子ども図書館所蔵のイングラムコレクションの中から、近代児童文学の黎明期に当たる19世紀イギリスの代表的な作品約50点を紹介する電子展示会を作成し、4月23日に公開した。資料の一部については、全文をデジタル化して「国立国会図書館デジタルコレクション」で閲覧できるようにしたほか、子どもの本の国際電子

図書館 (ICDL) ※1やインターネット・アーカイブ (Internet Archive) ※2のホームページで全文を見られる資料についてはリンクを案内するなどして、なるべく多くの資料の「中身」にも触れられるようにした。

(<http://www.kodomo.go.jp/ingram/index.html>)

※1 米国メリーランド大学の Human-Computer Interaction Laboratory とインターネット・アーカイブとの共同により2002年に開始された、子どものための電子図書館を目指すプロジェクト。世界中の人々の文化や社会、関心、生活様式等を理解するのに役立つ優れた児童書を提供することを目的とする。

※2 1996年にプレースター・ケールによって設立された米国の NPO 法人。様々なウェブ情報を収集しインターネットで公開しているほか、オープンライブラリーとして動画、音楽、書籍等のアーカイブなどを提供する。

4. 内外諸機関との連携・協力、広報活動等

○第11回国際子ども図書館連絡会議 [6月19日]

大阪国際児童文学振興財団、大阪府立中央図書館、国際子ども図書館を考える全国連絡会、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター、国立青少年教育振興機構教育事業部、全国学校図書館協議会、東京子ども図書館、読書推進運動協議会、日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、日本図書館協会、ブックスタート、文部科学省スポーツ・青少年局の13機関・団体から21名が参加した。

当館の平成24年度の活動及び平成25年度の取組について報告し、関係機関から意見等を聴取した。また、中学生、高校生を対象としたサービスの取組事例について、大阪府立中央図書館及び全国学校図書館協議会から報告いただいた。

○講演会の実施

●講演会「私が子ども時代に出会った本—落合恵子」

講師：落合 恵子（作家、クレヨンハウス主宰）

[4月21日 参加者75名]

落合講師は、自ら経営する子どもの本専門店「クレヨンハウス」の歩みと取組及び自身の人生の中で心の支えとしてきた様々な絵本や詩を、朗読を交えて紹介した。最後に、東日本大震災で被災した子どもたちへの思いや、今を生きる子どもたちに

関わっていくときの心構えについて述べた。

●講演会「シリーズ・いま、世界の子どもの本は？」(第7回)「いま、フランスの子どもの本は？」

講師：河野 万里子 (翻訳家、上智大学非常勤講師)

コリーヌ・カンタン (フランス著作権事務所代表取締役)

[11月16日 参加者73名]

河野氏は、自身が翻訳してきたフランスの児童書を紹介し、その魅力について話した。カンタン氏は、フランスの児童書の歴史と代表的な作品、児童書出版と翻訳の現状、子どもの読書を取り巻く状況などについて紹介した。

●講演会「トルコにおける児童書の執筆と出版」

講師：メリケ・ギュンユズ (セディル出版グループ編集局長、児童文学作家、児童文学研究者)

通訳：オメール・アユディレック (日本トルコ文化交流会)

[12月7日 参加者72名]

ギュンユズ氏はトルコの児童書の歴史、出版・流通事情及び子どもの読書推進活動について、自身の経験や、統計等の調査に基づいて話した。会場には当館所蔵トルコ語児童書及び講師が持参した資料を展示して、参加者が手に取れるようにした。

○国立科学博物館「教員のための博物館の日」への参加



8月23日、24日に国立科学博物館で開催された「教員のための博物館の日2013」に参加した。国際子ども図書館のブースで学校図書館サービス等の事業を紹介したほか、国際子ども図書館見学会を実施した。

○図書館総合展への参加

10月29日から31日まで、主要な図書館関係団体・企業等約160団体が参加する第15回図書館総合展(会場：パシフィコ横浜)に参加した。国立国会図書館の展示ブースにおいて国際子ども図書館について、パンフレットやディスプレイを使ったプレゼンテーションで紹介したほか、ポスターセッションにも参加し、平成27年度に予定しているリニューアルについて紹介した。

○一般向けの見学

個人向けのガイドツアーを毎週火・木曜日に行っているほか、団体向けの見学を行っている。平成25年度は、個人向け98件755名、団体向け44件822名の参加があった。

○平成25年度に刊行した主な刊行物

- 『国際子ども図書館の窓』第13号※ 2013年9月
- 『平成24年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録「イギリス児童文学の原点と展開：家庭小説・冒険小説・創作童話・学校物語」』※ 2013年10月
- 「国際子ども図書館調査研究シリーズ」第3号『学校図書館におけるコレクション形成：国際子ども図書館の中高生向け「調べものの部屋」開設に向けて』※ 2014年3月
- 国際子ども図書館メールマガジン 55～70号 2013年4月～2014年3月
※国際子ども図書館ホームページ (<http://www.kodomo.go.jp/>) に PDF 版を掲載。

5. 施設及びサービスの拡充に向けた準備

平成24年春に着工した増築棟工事は、平成27年夏の竣工に向けて順調に進んでいる。平成24年10月に始まった掘削工事は平成25年6月に終了し、7月から躯体工事に着手した。平成25年度末時点で、地下部分の躯体工事がほぼ完了した。



増築工事後の予想図

増築棟は地上3階、地下2階、建築面積1,100㎡、建築面積6,200㎡の規模である。地下1階、2階は約65万冊収蔵の書庫となり、既存棟書庫と合わせて、100万冊以上の収蔵が可能となる。1階には研修室を新設し、子どもの読書に関わる人材育成支援のための施設とする。2階は、「児童書研究資料室」を設置する。これにより、現在は施設の制約上、第一・第二の二つに分かれている資料室を統合し、調査研究環境の向上を図る。また、3階には事務室を設置し、執務環境改善による業務効率の向上を図るなど、児童書専門図書館としての機能の充実を図ることとしている。

また一方、既存棟については、増築棟に移設する2階の資料室跡地を利用して図書館を活用した調べ学習のモデルを体験できる「調べものの部屋」、本を手にとって見ることができる展示スペースである「児童書ギャラリー」等を設置し、子どもから大人まで幅広い人が子どもの本の魅力に触れることができる施設として、必要な改修工事を予定している。

増築・改修工事後のサービスの在り方については、平成23年3月に策定した「国際子ども図書館第2次基本計画」に基づき検討を行っている。施設・基本計画については、当館ホームページも併せて御覧いただきたい。

- 新館建設計画 (<http://www.kodomo.go.jp/about/future/design.html>)
- 第二次基本計画 (<http://www.kodomo.go.jp/about/law/basicplan2.html>)

数字で見る！ 国際子ども図書館

平成25年度（平成25年4月1日～平成26年3月31日）

（1）国際子ども図書館所蔵統計（平成26年3月31日現在）

資料区分				所蔵数		
資料 情報 課	図書 (単位：冊)	日本語	児童書（＊1）	251,598		
			児童書関連書、参考図書	18,643		
			小計	270,241		
		外国語	児童書（＊1）	欧米言語	57,824	
				アジア言語	26,588	
			児童書関連参考書	4,942		
			小計	89,354		
	計			359,595		
	逐次刊行物 (単位：タイトル)	雑誌	日本語	児童雑誌	1,488	
				児童関連誌	811	
			外国語	児童雑誌	欧米言語	45
					アジア言語	25
				児童関連誌	欧米言語	100
					アジア言語	12
		小計			2,481	
		新聞	日本語		10	
			外国語		1	
		非図書資料 (＊2) (単位：点)	静止画、紙芝居（＊3）		2,375	
	カード、カルタ（＊3）		206			
マイクロフィルム			2,076			
マイクロフィッシュ			35,924			
録音資料（CD、カセットテープ等）（＊4）			2,223			
映像資料（ビデオテープ、ビデオディスク等）			7,438			
電子資料（光ディスク、磁気ディスク等）			6,493			
児童 サービス課	開架閲覧用資料（単位：点）		20,265			
	貸出用資料（単位：点）		6,045			

＊1 学校教科書、教師用教科書、学習参考書、楽譜（冊子）、組み合わせ資料を含む。

＊2 教師用指導書、児童書関連書のうち非図書形態のもの数を含む。

＊3 タイトル数で集計。

＊4 教師用指導書のみ（児童書音楽資料は未所蔵。）

(2) 来館者統計

開館日(日)	285
来館者(人)	100,591
(うち中学生以下)	(16,863)

(3) 各室利用統計

第一資料室	開室日(日)	237
	利用者(人)	7,551
第二資料室	開室日(日)	237
	利用者(人)	4,802
子どもの へや・ 世界を知る へや	開室日(日)	285
	利用者(人)	55,260
	(うち中学生以下)	(17,210)
メディアふ れあいコー ナー	開室日(日)	285
	利用者(人)	40,546

※本のミュージアムの統計は「活動報告」参照のこと。

(4) 資料出納統計

国会サービス(点)	80
-----------	----

第一・第二資料室(点)	22,768
-------------	--------

(5) 複写サービス利用統計

(対象：国会サービス)

紙	件	5
	枚	30
プリント アウト	件	0
	枚	0
マイクロ	件	0
	フィルム(コマ)	0
	フィッシュ(枚)	0

(対象：一般)

紙	件	6,083
	枚	36,057
プリント アウト	件	471
	枚	8,910
マイクロ	件	0
	フィルム(コマ)	0
	フィッシュ(枚)	0

(6) 資料貸出統計

(対象：行政・司法各部門)

相互貸出し(点)	62
----------	----

(対象：一般)

図書館間貸出し	点	237
学校図書館セット貸出し	件	253
	点	11,493
展示会出品資料貸出し	件	5
	点	795

(7) レファレンスサービス統計

(対象：国会サービス)

文書回答	処理文書(通)	0
	処理(件)	0
電話回答	受理(件)	0
	処理(件)	0
口頭回答	受理(件)	0
	処理(件)	0
調査局経由※	処理(件)	5

※「調査局経由」は調査及び立法考査局で受付後、回付されたもの。

(対象：行政・司法各部門)

文書回答	処理文書(通)	0
	処理(件)	0
電話回答	受理(件)	2
	処理(件)	2
口頭回答	受理(件)	0
	処理(件)	0

(対象：一般)

文書回答	処理文書(通)	116
	処理(件)	207
電話回答	受理(件)	879
	(うち18歳未満)	(6)
	処理(件)	1,155
口頭回答	(うち18歳未満)	(10)
	受理(件)	10,921
	(うち18歳未満)	(1,083)
	処理(件)	14,097
	(うち18歳未満)	(1,369)

(8) 参観・見学統計

国会議員 前・元議員		件	1
		人	4
その他の国会関係者		件	0
		人	0
行政・司法		件	1
		人	4
国内	個人	件	98
		人	755
		(うち18歳未満)	(29)
	団体	件	115
		人	2,086
		(うち18歳未満)	(1,299)
	図書館関係者	件	2
		人	13
		(うち18歳未満)	(0)
	地方自治体・地方議会関係者	件	5
		人	14
		(うち18歳未満)	(0)
海外 (外国公館関係者を含む)		件	16
		人	115
		(うち18歳未満)	(13)

(9) 国際子ども図書館ホームページアクセス統計

http://www.kodomo.go.jp/ 以下の 全コンテンツ	ページビュー(件)	2,382,694
トップページ	トップページのアクセス(件)	322,371

国際子ども図書館利用案内

国際子ども図書館ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>

電話 03 (3827) 2053 (代表) 03 (3827) 2069 (録音による利用案内)

☆来館利用 ホームページ > 利用案内

問合せ先：企画協力課

開館時間：9:30～17:00 資料請求：9:30～16:30 (第一資料室・第二資料室)

複写受付：10:00～16:00 (後日郵送複写のみ16:30)

休館日：月曜日、国民の祝日・休日 (こどもの日は開館)、年末年始、毎月第3水曜日

休室日：第一資料室・第二資料室は休館日のほか日曜日は休室です。

所蔵資料：国内刊行児童図書・雑誌、外国語の児童図書・雑誌、児童書関連図書・雑誌など

※資料の利用は館内のみ。館外への帯出はできません。

☆レファレンス・資料案内 ホームページ > 本・資料を探す

問合せ先：資料情報課情報サービス係

申込方法：来館、文書 (図書館経由)、電話

※児童書・児童文学、児童図書館活動などに関する問合せに答えます。

※資料を直接確認しなければならないなど時間を要する調査及び聞き間違いが生じやすい外国語文献についてのレファレンスなどは文書で申し込んでください。

☆資料の複写 (有料) ホームページ > 利用案内 > 複写サービス

問合せ先：資料情報課情報サービス係

申込方法：来館、NDL-OPAC 経由 (登録利用者・機関のみ)、郵送 (登録利用者・機関のみ)

☆資料の図書館間貸出し ホームページ > 利用案内 > 図書館間貸出し

問合せ先：資料情報課情報サービス係

※「図書館間貸出制度」に加入している図書館のみ利用できます。

※雑誌や昭和25年以前刊行の図書など貸出しができない資料もあります。

☆見学・ツアー ホームページ > 利用案内 > 見学・ツアー

問合せ先：企画協力課企画広報係 (一般向け) 児童サービス課 (児童・生徒向け)

☆学校図書館セット貸出し ホームページ > 子どもの読書活動推進 >

学校・学校図書館へのサービス > 学校図書館セット貸出し

問合せ先：児童サービス課企画推進係

※「国際理解」をテーマとする児童書約50冊を学校図書館に貸し出します。

※セットに含まれる資料の解題をホームページに掲載しています。

国際子ども図書館の窓 第14号 2014.9

発行所 国立国会図書館 **国際子ども図書館** 2014年9月25日発行
編集責任者 佐藤 毅彦
〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電 話 03 (3827) 2053 (代表) FAX 03 (3827) 2043
印刷所 株式会社 山越

本誌に掲載した論文等のうち、意見にわたる部分はそれぞれ筆者の個人的見解です。
本誌に掲載された記事を全文又は長文にわたり抜粋して転載する場合は、事前に国際子ども図書館企画協力課協力係に連絡してください。



The Window

the journal of the International Library of Children's Literature
No.014 September 2014

Contents

【Frontispiece】	
【Foreword】	Takehiko Sato 1
【Research reports】	
Mongolian children's books	Noriko Tsuda 3
Death in children's books: focusing on <i>The White Ravens</i> and winners/ nominees of the German Children's Literature Award ..	Reina Nakano 13
Overseas research report: children's book institutions in Europe and their activities	Daisuke Hirasawa 24
【Column】	
"Nursery rhyme and picture book hour for little children" in the ILCL	Naomi Omori 33
【Highlights】	
Children's service workshop FY 2013	Children's Services Division 36
Exhibition: The World through Picture Books—Librarians' favourite books from their country	Yumi Tobita 40
Japanese Picture Books in the 21st Century: a selection for three exhibition cases	Yukiko Hiromatsu 43
【International exchange】	
The 79th IFLA General Conference.....	Yumi Tobita 46
Mutual visit program with the National Library for Children and Young Adults in Korea	Akiko Hashizume 48
Lecture: The writing and publication of children's literature in Turkey	Planning and Cooperation Division 51
The list of foreign visitors and guests	Planning and Cooperation Division 54
【Column】	
Picture books in Sinhalese: a bridge between Sri Lanka and Japan	Aki Fujishiro 55
【The list of events and activities; April, 2013—March, 2014】	58
【ILCL activity report】	60
【ILCL in figures】	76
【ILCL user guide】	80

International Library of Children's Literature, National Diet Library
Tokyo

